

---

# 史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

ともゆき

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

### 【Nコード】

N6766B

### 【作者名】

ともゆき

### 【あらすじ】

あの有名な「アメリカ横断ウルトラクイズ」が21世紀に復活した。しかも参加者はCNRの皆さんとコナンキャラ。果たして栄冠は誰の頭上に輝くのか！？ 以前「コナン小説リング」にて掲載されていた作品の加筆修正版です。

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

## プロローグ（前書き）

はじめに申し上げておきますが、この作品は全くの創作です。  
この作品に登場する人物は全てフィクションであり、実在の人物・  
団体とは一切関係がありません。

## プロローグ

某月某日、日売テレビのあるスタジオ。

一組の男女が日本列島とアメリカが描かれた巨大な地図の前に立っていた。

そして、日本列島とアメリカの上には何かのコースのような線が描かれていた。

「本番行きますー！」

「本番行きますー！」

「本番5秒前、4、3、2、1、Q！」

工藤優作「史上最大！」

工藤有希子「CNR！」

二人「アメリカ横断ウルトラクイズ〜！」

優「さあ、待ちに待った　といつても誰が待ったかわかりませんが　CNRウルトラクイズが始まりました。総合司会の工藤優作です」

有「工藤有希子です。よろしくお願ひいたします」

優「まあそれにしても、この話の作者は何を考えているんでしょうかね？　ウルトラクイズなんて昔の番組を今更復活させるなんて」

有「しかもCNR作者の皆さんとコナンキャラのコラボレーションで話を進めるといいますから」

優「大体作者さんとコナンキャラのコラボレーションってというのは山崎佳実さんの専売特許じゃないですか？」

有「いや、聞いた話なんですけどね。何でもこの作者はCNRでミステリー書きとして知られているのですが、ミステリーしか書けないのではないか、と思われるのが嫌なのでこの話を考えた、という

んですが」

優「そんな単純な理由なんですか？ まあ、それはとにかく、『ウルトラクイズ』を知らない皆さんのために説明しておく、我こそはクイズ王と言う人が、北は北海道から南は九州、沖縄まで全国津々浦々から集まって、あのアメリカ大陸を横断しながらクイズに挑戦しよう、というまさに史上最大のクイズ番組なワケです。それでは、今回のルートの紹介です。まずは東京ドームで国内第一次予選」

有「ここで100名が決定」

優「続いて成田空港で第二次予選」

有「グアム行きの飛行機に乗れる50名が決定致します」

優「そして飛行機に乗ってホツとするのもつかの間、このグアムに向かう機内が第1チェックポイントとなります」

有「敗者は一步もグアムの地を踏むことなく日本へ強制送還されま

す」

優「第2チェックポイント、グアム」

有「グアムと言ったら『アレ』ですよ、『アレ』」

優「第3チェックポイント、ハワイ」

有「ワイキキビーチで皆さんのチームワークを試させていただきます」

す」

優「第4チェックポイント、まだまだハワイ」

有「草木も眠る丑三つ時にクイズの奇襲攻撃」

優「そしていよいよアメリカ本土西海岸へと上陸。第5チェックポイント、ロサンゼルス」

有「挑戦者の推理力が試されます」

優「第6チェックポイント、モハーベ砂漠」

有「砂漠に舞い散るクイズの砂嵐」

優「第7チェックポイント、グランドキャニオン」

有「ここで皆さんに日ごろのストレスを晴らしてもらいましょう」

優「第8チェックポイント、ダラス」

有「テキサスの大地で挑戦者達が荒馬となります」

優「第9チエックポイント、ニューオーリンズ」

有「ミシシッピ河口で対決クイズ」

優「第10チエックポイント、アトランタ」

有「南北戦争の地で21世紀のクイズ戦争が繰り広げられます」

優「そしてようやく東海岸に到達。第11チエックポイント、マイアミ」

有「マイアミビーチで繰り広げられる激戦とは？」

優「そして準決勝、ワシントンDC」

有「世界の政治の中心地を通せんぼ」

優「そして幾多の難関乗り越えて、全行程2万キロの旅の果て、ついにニューヨーク決戦」

有「ここまで勝ち進めるのはたったの…」

二人「二人！」

有「果たして栄えあるCNRクイズ王の栄冠は誰の頭上に輝くのでしょうか？」

優「そして、挑戦者を待ち受ける数々の難関とは？ それでは国内第一次予選から見ていただきましょう」

（国内第一次予選へ続く）

**国内第一次予選・東京ドーム（前書き）**

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

## 国内第一次予選・東京ドーム

8月のある日、東京ドームの一角に怪しげな一団が集まっていた。彼らはこの日、CNRが主催する一大イベント「CNRアメリカ横断ウルトラクイズ」に出場 するために北は北海道から南は沖縄に至るまで、全国各地からここまで交通費自腹でやって来た一団だったのだ。

午前6時過ぎ、何処からともなく、

「caviar! caviar!」

今回の大会で海外リポーター&出題を務めるcaviarさんと呼ばれるコールが聞こえてきた。

やがてそのコールは少しずつ広がって行き、やがてドームに集まった全員が、

「caviar! caviar! caviar、caviar、caviar、caviar…」

と「caviar」コールをするまでに広がっていった。

そのコールが最高潮に達した頃、

「おはようございます!」

MC席に待ちに待ったcaviarさんがやってきた。

ウオーツ、と歓声上がる。

「さあ、いよいよ始まりました、CNRウルトラクイズ。朝も早くからこれだけの皆さんに集まっていたいて私はとても嬉しく思っています!」

再び歓声上がる場内。

「それでは行くぞーツ! みんな、ニューヨークに行きたいかーツ

!」  
「オーツ!」

「どんなことをしても絶対にニューヨークに行きたいかーッ！」  
「オーッ！」

「罰ゲームは怖くないかーッ！」

「オーッ！」

「ホントだな？」

笑いが起こる場内。

「それでは皆さん、お待たせを致しました。CNRアメリカ横断ウルトラクイズ、栄えある第1問を発表したいと思えます」

「いよいよ記念すべき第1問が発表される、と知り固唾を飲み込む場内。」

caviarさんが後ろに立っているボードを見る。

「記念すべきCNRウルトラクイズ、栄えある第1問は、これだーっ！」

それを言うと同時にボードの幕が開いた。

『ニューヨークの自由の女神とお台場にある自由の女神は同じ方角を向いている』

思わずざわめきが起こる場内。

「ニューヨークの自由の女神とお台場にある自由の女神は同じ方角を向いている」

caviarさんがボードに書いてある問題をそのまま読む。

「…これが今回の第1問です。答えが だと思う方は 側の受付を  
通って3塁側のスタンドへ、xだと思う方はx側の受付を  
通って1塁側のスタンドへ移ってください。午前8時30分までに入場され  
なかつた方はその場で失格となります。それではまた後でお会い  
しましょう」

そしてcaviarさんはドームの中へ消えていった。

そして早くも受付を済ませて x両方のスタンドへ入っていく挑

戦者達もいるが、ここではドームの外で第1問の答えを考えている皆さんをちよつとウォッチしてみよう。

「…ねえ、新一」

毛利蘭が工藤新一に話しかけてきた。

「何だ、蘭」

「新一はどつちだと思つて？」

「そついわれてもなあ…。オレNYもお台場の自由の女神も両方見たけど、どの方角を向いているか、何て気にも留めなかつたぜ」  
「でもどつちなんだらう？」

「平次はどつちや思つてるの？」

遠山和葉が聞いた。

「こついうのは、あまり深く考えん方がええんや」

隣にいる服部平次がボードを見て呟いた。

「じゃ、平次はどつちか決めてるの？」

「まあな」

「…あ、あつたあつた」

白夜さんが持参のガイドブックを広げた。それに集まる一同。

「…NYの自由の女神は海の方を向いてるのよね」

「…つてことは西の方を向いてないつてことですよな？」

そつ言つたのはミストラルさんだつた。

「ところで、お台場の自由の女神つてどつち向いてたつけ？」

櫃割帝王さんが言う。

「何かで見たけど、東京タワーに背を向けて立っていたような…」  
「びいたあ ぱんさんだつた。」

時間が経つにつれドームの中に入っていく観客が少しずつ増えていき、締め切り時間前にはほぼ全員がドームへの入場を終えていた。

面白いことにこれだけ多くの人数がいるにもかかわらず、時間が経つにつれ、xそれぞれがほぼ半数近く分かれていた。

\*

8時40分近くだった。

米花大学マーチングバンドのファンファーレが高らかに鳴り響き、バックスクリーンのゲートからオープンカーに乗ったcaviarさんが現れた。

そしてマウンドに設置されたMC台の上に立つ。

「お待たせいたしました！ CNRウルトラクイズ国内第一次予選を開催したいと思います！」

2万5千人を軽く超えるであろう、挑戦者達の歓声がドームの中に鳴り響いた。

「ここを突破できるのは100名。そして数々の難関を乗り越えて初代CNRクイズ王の栄冠を手にするのは果たして誰なのでありましようか？」

再び歓声が起こる場内。

「それでは行くぞ！ …みんな、ニューヨークに行きたいかーッ！」

「オーッ！」

「どんなことをしても絶対にニューヨークに行きたいかーッ！」

「オーッ！」

「罰ゲームは怖くないかーッ！」

「オーッ！」

「絶対に第1問突破するぞーッ！」

「オーッ！」

25000人がこの瞬間一つとなっていた。

「それではお待たせを致しました。第1問の正解を発表したいと思います！」

自然と3墨側からは「コールが、1墨側からは「x」コールが起こり始めた。

「第1問『ニューヨークの自由の女神とお台場にある自由の女神は同じ方角を向いている』か×か。…の皆さん、自信はありますか？」

「オーツ！」

「×の皆さん、自信はありますか？」

「オーツ！」

「それでは答えを発表いたします。第1問の答えは…」

「まーる！ まーる！ まーる！…」

「ばーつ！ ばーつ！ ばーつ！…」

「これだっ！ 来い！」

一瞬の間を置いて東京ドームのスコアボードに表示された答えは、

「×」

その瞬間一塁側スタンドは興奮の坩堝に包まれ、もう一方の三塁側スタンドは呆然としたままだった。

「…ニューヨークの自由の女神は大西洋からやってくる船舶を見守る、という意味を込めて南南東の方角を向いています。一方、お台場の自由の女神像は外洋、南の方角を向いています。したがって答えは×！ ×の皆さん、おめでとう！」

caviarさんが第1問の正解の解説をする。

しかし、である。まだまだ第1問目を突破しただけである。

これからまだまだ100しかない席を巡っての ×クイズバトルが続くのである。

\*

その後、スタンド・グラウンド ×お別れクイズ、内外野お別れクイズと続きいつの間にか東京ドームのグラウンドに残っているのは2000人ほどとなっていた。

「…それではいよいよ x 走りクイズを始めます。答えが だと思  
つたら のボールを持って のサークルへ。x だと思ったら x のボ  
ールを持って x のサークルへと行って下さい。制限時間内にサーク  
ルに入らなかつた人は失格となります。よろしいですね？」

caviarさんが挑戦者を見回しながら言う。

そして、その挑戦者達の目の前には何千個と言う x のボールが  
置かれていた。

「それでは問題。福岡ダイエーホークスの王監督の血液型はO型で  
ある。さあ来い！」

その声とともに挑戦者がそれぞれ x のボールを持ってサークル  
に駆け込んでいった。

そして30秒後。

「きれいに分かれましたね。…それでは行こう、正解はこれだ！  
スコアボードに「」の文字が浮かび上がった。

\*

一方こちらは敗者となった挑戦者達が座っているスタンド。

「皆さんご苦労じゃった」

何故か野球のヘルメットを被った阿笠博士が現れた。

今回のウルトラクイズで「敗者の味方」役を受け持っているのだ。  
勿論敗者の味方と言ったらやることは唯一つ。

「ちきしょう、この野郎！」

そして博士のヘルメットに向かってピコハンマーが振り下ろされ  
る。

そう、阿笠博士は敗者にピコハンマーで殴られる役である。

「悔しい〜！」

ピコ！

「…トホホ、何でワシがこんな役をやらにゃならんのじゃ…」

\*

一方グラウンドでは、

「問題。『ルパン三世』の銭形警部の名前は『平八』である」

（答え・×。銭形警部の名前は「幸一」）

「問題。読売ジャイアンツの応援歌『闘魂こめて』と阪神タイガースの応援歌『六甲おろし』の作曲家は同じである」

（答え・。どちらも古関裕而氏の作曲）

といった問題が続き、そのたびにある者は のボールを持ってのサークルへ、ある者は×のボールを持って×のサークルへ駆け込んでいく。

そのたびに片方のサークルでは歓声が、もう片方のサークルでは落胆の聲が上がる。

やがて、

「：正解は！ まずはあなた方が予選突破だーッ！」

「答えは×！ おめでとぅ、予選突破だ！」

少しずつ第一次予選突破者が出てきた、次第に「合格者席」が埋まっていく。

そして、いつの間にやら99の席が埋まり、残る椅子はわずか一つとなった。

グラウンドには2人の人物がいた。

一人は毛利小五郎、もう一人は真つ向くじらさんだった。

「さあ、残る一つの席を巡ってこの二人が残りました。まずは皆さん、このお二人に拍手をお願いします」

場内が暖かい拍手に包まれる。

「それでは最後の1名を決める問題だ。問題。『グルになる』の『グル』とはグループのことである。さあ来い！」

それを聞いて真つ先に飛び出したのは小五郎のほうだった。

小五郎は のボールを取ると のサークルに駆け込む。

一方の真つ向くじらさんの方は出遅れてしまったこともあったか

らか、xのボールを拾い、xのサークルに駆け込んだ。

「…そこまで〜！ …毛利小五郎さんはへ、真つ向くじらさんはxへと駆け込みました。…毛利さん、自信はありますか？」

「勿論！」

「真つ向くじらさん、自信はありますか？」

「はい！」

「…それじゃ会場の皆さんに聞いてみましょうか。会場の皆さん、と思う方、拍手をお願いします」

かなりの拍手が聞こえてきた。

「…それではxと思う方、拍手をお願いします」

これも同じくらいの拍手が聞こえてきた。

「…会場も同じくらいに分かれていますね。それでは答えを見てみましょう。泣いても笑ってもこれが最後。答えは、…これだ！」

スコアボードに表示された答えは「x」。

「嘘！」

真つ向くじらさんが叫ぶ。

そしてもう一方の小五郎は膝をがっくりと落としてしまった。

「…『グルになる』との『グル』とはぐるぐると輪になるところから付けられたものです。したがって答えはx。おめでとう、真つ向くじらさん。あなたが100人目だ！」

\*

「…ということで第一次予選突破100名が決定いたしました。それでは皆さん、成田空港に向かってバンザイ！」

100名が万歳をする。

「じゃ、お父さん行ってくるね」

100人の中に残った蘭が小五郎に向かって言う。

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

「ふん、成田でとつとと落っこちまえ！」

8月×日 国内第一次予選突破100名決定！

（第二次予選・成田空港へと続く）

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

**国内第二次予選・成田空港（前書き）**

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 国内第二次予選・成田空港

東京ドームの予選から3週間が過ぎた9月上旬のある日。

午前6時近いという早朝。成田空港近くにあるホテルのある一室になんとも怪しげな一団が集まっていた。

それぞれスーツケースやらバッグを数多く持っている。

もうお分かりだろう。3週間前の「CNRウルトラクイズ」の第一次予選を突破した100名の挑戦者達が集まっていたのだ。

彼らはこれから1ヶ月に及ぶクイズツアーに備え荷物を持ってきていたのだ。

「おはようございます！」

6時を少し回った頃、caviarさんが現れ、歓声が上がった。「さあ、いよいよ今日は第二次予選です。ここを通過できたら、飛行機に乗って日本脱出、憧れのグアム行き。さて、第二次予選の方法ですが……。勿論、これに決まっていますよね？」

そう言つとcaviarさんはプラカードを取り出した。

そのプラカードには「ジャンケン」と書かれていた。と、

「ちよつと待ったあ！」

と声が聞こえ、阿笠博士が現れた。

「あれ、阿笠博士、どうしたんですか？」

caviarさんが聞く。

「そんなジャンケンなんて、みんなやりたくないじゃろう？　ここにいるみんなの本当の希望はこれじゃろ？」

そう言つと阿笠博士は「全員通過」と書かれたプラカードを取り出した。

歓声が起こる場内。

「何を言ってるんですか、博士。やはりここはジャンケンじゃない

と皆さん怒りますよ」

caviarさんがそう言うと阿笠博士は、挑戦者に向かって、

「ワシらはジャンケンがだいつ嫌いじゃ！」

「だいつ嫌いだ！」

「だいつ嫌いじゃ！」

「だいつ嫌いだ！」

「ジャンケンなんて子供の遊びはやめろー！」

「やめろー！」

「やめろー！」

「やめろー！」

「第二次予選は全員通過じゃー！」

「全員通過だ！」

「全員通過じゃー！」

「全員通過だ！」

とシユプレッヒコールを浴びせる。

その様子に思わず苦笑いをするcaviarさん。

「：わかりました。では私が今から3問問題を出しましょう。その

3問全部正解したら全員通過とします！」

思わず歓声が起こる場内。

「但し！ …但しですよ。その間、絶対ジャンケンという言葉を口

にしないこと！」

「ちよつと待つのじゃ！ それはいくらなんでも…！」

「全員通過がかかっているんですから、それくらい当然でしょう？」

「よーしわかった。いいか、みんな決してジャン…、グルジムなん

て言っっちゃ駄目じゃぞ！」

「大丈夫ですね。それでは行きましょう。問題！ フランスの俳優

ジャン・ギャバンと日本の俳優、高倉健。この二人のファーストネ

ームをフランス、日本の順で言うと何？」

「うっ…！」

思わず答えに詰まる全員。答えはわかっているのだが、それはNG

ワードなのだから。

…数秒後、

「はい、誰も答えられませんでしたね。それでは第二次予選はジャンケンに決定！」

caviarさんがそう言うのとスタッフがジャンケンのポイントが表示される判定機を持ってきて、予定通りのジャンケン大会が始まったのである。

\*

「…今度はCNRの作家さん同士の対決ですね。…高明さんと臙月さんの対決です」

「えっ、うそー！」

そう言いながら二人が壇上にあがった。

「…どうしたんですか？」

caviarさんが聞く。

「昨日泊まったホテルの部屋、一緒だったんです」

高明さんが言う。

「そうだったんですか…。でも、『昨日の敵は今日の友』と言うでしょ？ ここからは二人は敵同士になりますからね。…それでは行きましよう、せーの、ジャンケン、ホイ！」

結果は3対1で高明さんが勝ち、第二次予選通過となった。

「頑張つてねー！」

臙月さんの声に送られ高明さんが部屋を出て行った。

\*

「…えー次の対戦は…、群馬県警の山村刑事と警視庁の高木刑事です」

そう言われて二人が壇上に登る。

「…警察官対決となりましたが、自身はありますか？」

「群馬県警を代表して必ず勝ちます！」

山村刑事が言う。

「…高木刑事は？」

「松本警視に出発する前にここで負けたら減俸だ、って言われました」

思わず笑い声が起こる場内。

「お互いのメンツがかかってますね。それでは行きましょう。ジャンケン、ホイ！」

山村刑事1ポイント獲得。

「用意、ジャンケン、ホイ！」

山村刑事2ポイント目獲得。

「高木刑事、2ポイント取られちゃいましたね。…このままじゃ減俸になっちゃいますよ」

「いやいや、これからですよ」

こういう高木刑事だったが目は笑っていなかった。

この後ジャンケンは高木刑事が2連勝し、2対2となった。

「さあ、2対2です。果たしてグアム行きの手ケットを手にするのはどっちか？ セーの、ジャンケン、ホイ！」

二人ともパーを出し、アイコとなった。間髪入れず caviar さんが、

「ジャンケン、ホイ！」

またまた二人ともチョキを出し、アイコとなった。

「用意、ジャンケン、ホイ！」

山村刑事がグー、高木刑事がパーを出し、高木刑事が逆転勝ちをした。

「おめでとう、高木刑事の勝ち！」

思わずガッツポーズをする高木刑事。

「…山村刑事、何か一言」

「減俸しないで下さいね」

\*

この後もジャンケン大会は続き、最終的に50人の勝者と50人の敗者が決定した。

50人の勝者は荷物を抱えると搭乗手続きをするために空港へと

向かっていった。

一方こちらは敗者となった50名の控室。

「みんなご苦労じゃった」

阿笠博士がやってきた。

「しかしのお…。あんなジャンケンなんて子供の遊びなんぞに負けてグアムに行けない、なんて悔しいと思わんか？ そうじゃろう？」

50人は無言で頷く。

「実はな、ワシもそう思って、スタッフに何とかならんか、と交渉し取ったんじゃ。そしたら、座席のキャンセルが入ったという情報が入ったんじゃ」

それを聞いた挑戦者達の間でざわめきが起こった。

「…もうわかったな？ いまから敗者復活じゃ！」

それを聞き、歓声を上げる挑戦者。

するとスタッフからヘアバンドのような早押し機が50人に配られた。

「敗者復活の方法はきわめて簡単じゃ。ワシが問題を出すのでわかった時点で頭の上のボタンを押して答える早押しクイズじゃ。正解した者3名を敗者復活させる。それでは問題！」

50人が頭の上のボタンに手をかける。

「飛行機と同じ速度で飛んでいるカラスといたら？」

ポーン。

「はい、ジェーンさん」

「窓ガラス」

ジェーンさんが答える。

「正解！ 敗者復活じゃ！」

それを聞いたジェーンさんは「敗者復活」の禪をもらってそれを肩に掛け、荷物を抱えると部屋を出て行った。

「…もうお分かりじゃな。敗者復活の問題は全部なぞなぞじゃ。み

んなも柔軟な発想で答えるんじゃないぞ。それでは次の問題。『サシスセソ』の服と言ったら何？」  
ポーン。

「はい、タナトキシさん」

「作業服（サ行服）」

「正解！ 敗者復活！」

そしてタナトキシさんが部屋を出て行く。

「さあ、あと一人じゃぞ。それでは問題。宇宙飛行士が宇宙へ出ると食欲がなくなるそうじゃが、それは何故？」

ポーン。

「はい、朧月さん」

「空気（食う気）がなくなるから」

「正解！ 敗者復活じゃ〜！」

こうしてジェーンさん、タナトキシさん、朧月さんの3人が敗者復活をし、今飛び立とうとしている飛行機に乗り込んでいった。

\*

今まさに飛行機がグアムに向けて飛び立とうとしている。

そんな空港ビルの屋上。阿笠博士とジャンケン&敗者復活で敗れた47名がいた。

「シュプレツヒコール！」

阿笠博士が言うと、

「おー！」

47名がそれに答える。

「国辱ツアー、帰れー！」

「帰れー！」

「アメリカへ行くお前たちはもう日本人ではないぞー！」

「日本人ではないぞー！」

「もうお前たちのことは忘れちゃったぞー！」

「忘れちゃったぞー！」

「それでも、気をつけて行ってらっしゃい！」  
「行ってらっしゃい！」

47人のシュプレツヒコールに送られて飛行機が離陸し、あっという間にはるか彼方、グアムの方角へと飛んで行った。

「頑張れよー！」

誰かが飛行機の見えなくなった空に向かって叫んだ。

9月 日 国内第二次予選通過者・53名グアムに向けて出発！

（第1チェックポイント・機内へと続く）

第1チェックポイント・成田 グラム間機内（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第1チェックポイント・成田 グラム間機内

飛行機が成田空港を飛び立ちあっという間に日本本土が見えなくなつた。

東京ドームの x、成田空港のジャンケンを勝ち抜いた53人の挑戦者はようやく一安心したかもしれない。

∴しかし、ただですまないのがウルトラクイズ。

飛行機が水平飛行に入るとともにcaviarさんが立ち上がり、ハンドマイクを取り出した。

「みなさん、これから機内400問ペーパークイズを行ないます。

制限時間は40分、途中書き直しは認めません。そして、ここを通過できるのは40名。残り13名の方はグラムを地を一步も踏むことなく日本へ帰国となります」

そして53人が座っている座席に衝立が立てられ、問題用紙が配られた。

「それでは第1チェックポイント、機内400問ペーパークイズ、用意！」

そしてcaviarさんがホイッスルを吹く。

53人が一斉に問題用紙を広げ解答を書き始めた。

ペーパークイズについて少しルールを説明すると、問題は3択問題で自分が正解だと思う番号を解答用紙にチェックして行く方式である。

問題は200問ずつに分かれ、休憩を挟んで前半20分、後半20分の計40分で行なわれる。

\*

「∴それでは、現在挑戦者の皆さんが解答をしている問題をお教えしましょう」

caviarさんが座席の後ろでカメラに向かって小声で言った。

「問題。平家物語の冒頭『祇園精舎の鐘の声』の祇園精舎は何処にある？ 1・中国。2・タイ。3・インド」（正解：3・インド）

「問題。忠臣蔵でおなじみの赤穂四十七士。大石姓は何人いた？

1・2人。2・3人。3・4人」（正解：2・3人）

「問題。カニ缶の身は何故紙に包んである？ 1・化学変化防止。

2・酸化防止。3・身崩れ防止」（正解：1・化学変化防止）

「問題。オリンピックで聖火リレーが初めて実施されたのは？ 1・

第8回パリ大会。2・第11回ベルリン大会。3・第14回ロンドン大会」

（正解：2・第11回ベルリン大会）

「問題。次のうち、プログラミング言語でないのはどれ？ 1・A。

2・B。3・C」（正解：1・A）

\*

そうこうしているうちにあっという間に時間は過ぎて行った。

「残り時間1分！」

caviarさんの声がする。

その声を聞くと、ある挑戦者は「何も書かないよりはマシ」とばかりに解答用紙の同じ番号をマークし始め、ある挑戦者は自分が解答した番号をチェックし始めた。

「残り30秒！」

そして時間は過ぎていく。

「5秒前！ 4…、3…、2…、1…、そこまで！」

とりあえず40分の戦いは終わり、ホッとする53人。

解答用紙を回収した後、caviarさんが、

「さあ、お待ちかね。食事と行こうか」

この一言で緊張がほぐれたのか、機内食が運ばれるとあっという間に機内は和やかなムードになった。

\*

成田から約4時間半。機内からグアム島が見えてきた。そして、飛行機はゆっくりとグアムの地に降り立った。そして、到着した飛行機にタラップが横付けされた。

caviarさんがタラップを降り始めた。

「さあ、グアムへとやってきました。今日のグアムの天気は快晴。すばらしい青空が広がっています」

そしてタラップを全部降りると、そこにはゲートがあった。

「果たしてこのブーブーゲートを無事に通り抜けてグアムへと上陸できるのは誰なのでありましょうか？」

「…まずは、草野ベリーさんです」

そう言われて草野ベリーさんがタラップを降りて来た。

「問題どうでした？」

「全然自信ないです」

「まあ、誰もそう言いますからね。それでは行きましょう。せーの！」

そして草野ベリーさんがゲートに降りる。

「おめでとー！ 合格！」

\*

「次は…、白馬探君です」

そう言われて白馬がタラップを降り始めた。

「自信はどうですか？」

「黒羽快斗が通ってボクが通らないはずがないでしょう！」

「おお、たいした自信だね。それでは行こう。せーの！」

そして白馬がゲートに降りた。

「おめでとー、合格！」

\*

「次は隼月さんです」

そう言くと隼月さんがタラップを降りてくる。

「どうでした？」

「だめ、全然わかりません」

「気にしないで、それでは行こう。せーのー！」

しかし隴月さんがゲートに降りると、無情のブザーが鳴った。  
思わず天を仰ぐ隴月さん。

そしてUターンをすると飛行機に消えていった。

「残念だったね」

\*

「次は工藤新一君です」

そう言うとき新一がタラップに現れた。

「…自信はあるかい？」

「ないとは言えないでしょう。ここまで来ておいて」

「さあ、行くぞ。せーのー！」

そして新一がゲートに降り立った。

「おめでとう、合格だ！」

「よし！」

そして新一がグアムの地に降り立った。

「ちなみに、機内トップです！」

caviarさんが言う。

そういつと新一は無言でガッツポーズをする。

\*

「さあ、次は白鳥任三郎警視ですね」

そう言われて白鳥刑事がタラップに降りてきた。

「あなたの部下の目暮警部も高木刑事も既に合格していますからね。  
上司としては負けられませんね」

「…当たり前のことを聞かないでください」

「それでは行こう、せーのー！」

そしてゲートに乗る。

「おめでとう！ 合格！」

そのときcaviarさんは心なしか白鳥刑事が安堵の表情を浮

かべたように思えた。

\*

「次は…、鈴木綾子さんですね」

そう言われて園子の姉・綾子が降りてくる。

「姉貴、大丈夫だつて！」

既に合格した園子の声が聞こえる。

「ほら、妹さんもまあ言ってますから。それでは行こう。せーの！  
しかし無情にもブザーが鳴った。

「あ…」

思わず口をアングリさせる園子。

「…妹さんに何か一言」

「園子！ 私の分も頑張りなさいよ！」

そういうと綾子は飛行機に消えていった。

\*

「毛利蘭さんです。さあ、いらっしやい」

そして蘭がタラップを降りてくる。

「新一君は既に上陸を決めてるからね。一緒に上陸したいね  
見ると新一がじつと蘭を見つめている。」

「さあ行こう。せーの！」

そして蘭がゲートに下りる。

「おめでとう、合格！」

\*

「服部平次君です」

そして服部が飛行機から現れた。

「自信はあるかい？」

「工藤のヤツが合格してオレが合格しないはずがないやろ！」

「ほほお、たいした自信だね。それでは行こう、せーの！」

そして服部がゲートに降りる。

「おめでとう！ 合格！」

それを聞いた服部はそれが当然と言うように合格者の輪の中に入

っていった。

\*

そして53人の判定が終わり、グアム島に上陸した40人が決まった。

「グアムに上陸した40名が決まりました。それではバンザイ！」  
そして40人が万歳をする。

その一方で機内には13人のグアムに上陸できずに残された敗者がいた。

皆それぞれただ呆然とした表情で外を見ていた。

やがて飛行機が離陸し、日本へと向かって飛び立っていった。

9月 日 第1チェックポイント 失格者13名帰国

（第2チェックポイント・グアムへ続く）

## 第1チエックポイント・成田 グラム間機内（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「さあ、いよいよグラム上陸40名が決定いたしました。

この次はいよいよグラム。どのような戦いが展開されるのでしょうか！」

工藤有希子「…というところなんですが、今日はここまで！」

優「それはないでしょう？ 皆さんだつて早く次の回が見たいと思つてるのに…。お願いだからちよつとだけ教えてくれませんか？」

有「じゃちよつとだけ。何でも、今度のグラムのドロンコプールはかなり深く作つてあるとかいう話ですよ」

優「ほほお…、となると、一度はまったら抜け出せない、と言つてとですか？ 一体誰が泥の海に落ちるんでしょうね？」

有「それは次回のお楽しみ、と言つてことで」

優「それでは、勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

**第2チェックポイント・グアム（前書き）**

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第2チエックポイント・グアム

早朝の成田空港のジャンケン大会から始まり、グアム上陸まで息つく暇もなく続けられたクイズバトルから一夜明けた翌日。

早朝からビーチに出てきて何やら怪しげなことをやっている一団がいた。

あるものはビーチに人が横になるくらい穴を掘り、あるものはその穴に水を入れ、あるものはその水と土をこね…。

そう、ご存知「あのクイズ」の準備をしているのだが、それが出てくるのはもう少し後で。

\*

それから数時間後。

40人の挑戦者がグアムのビーチに出てきた。

「みんな、おはよう！」

caviarさんが挑戦者に呼びかけた。

「いや、今日もすばらしい晴天だね！ この青い空、この青い海。ようやく海外にやってきた、って実感が湧いてきたんじゃないかな？」

確かに40人の顔も何処となく晴れやかである。

「ここで行ないますクイズですが…。グアムと言ったら、当然あれだよな？」

そしてcaviarさんが指差した方向には「**「**と**「x**」と書かれた2枚の発泡スチロール板がはめ込まれたゲートが立っていた。思わず笑い声が起こる。

「ご存知、突撃 xドロンコクイズだ！」

caviarさんは自分の隣に立っている1〜40までの番号が振られた封筒がぶら下がってる物干し台のようなものを指差す。

「ここに1から40までぶら下がっている封筒があるので、皆さんは好きな番号を選んで持ってきてください。そして私が問題を読む」

ので正解だと思った方に飛び込んでください。正解だとマットが受け止めますが、ハズレだとドロンコプールの中にドボーン。ここを通過できるのは28名。次の行き先は…、ハワイだ！」  
40名の歓声が起こる。

「…さて、1番手で挑戦してみたい人はいるかな？」  
そのとき、一人の男の手があがった。

「…お、横溝刑事、やってみますか？」

「折角ですからね、やってみましょう」

そう、最初の挑戦者は静岡県警の横溝刑事だった。

「じゃ、問題を選んで」

そして横溝刑事は封筒を持ってきた。

「それでは行こう、問題。日本から南極へ行くのにパスポートはいらない。さあ行け！」

そして横溝刑事は走り出した。

「さあ、へ行った、へ行った…」

caviarさんが実況する中、横溝刑事はのゲートに飛び込む。  
「そんなわけないだろう！」

次の瞬間、横溝刑事は泥のプールに落ちて行った。

\*

「さて次は…、CNRの中からとーやさん、行ってみようか？」

「え、ボクがですか？」

そう言われてとーやさんは慌てて封筒を持ってきた。

「それでは行こう、問題。漫画『巨人の星』の星飛雄馬。現役引退後は巨人のコーチとなった。さあ行け！」

そしてとーやさんが走り出した。

とーやさんは一瞬xへ行きかけたが、思い直したか方向転換すると、へ向かっていった。

「おっと、xへ行きかけたけど、へと行った。果たしてこれが吉

と出るか、凶と出るか？」

そしてとーやさんが のゲートに飛び込む。

「おめでとう！ その通り！」

とーやさんは無事マットに受け止められ、ハワイ行きを決めた。

\*

「次。鈴木園子さん！」

そう言われた園子、いきなり着ていたTシャツと短パンを脱ぎ始めた。

おおっ、と男性挑戦者の歓声上がる。

何と園子は下にビキニの水着を着ていたのだ。

「いや、大胆ですねえ」

「やっぱりプールに飛び込むとなると、ね。」

園子が問題の入った封筒を持って来ながら言う。

「はは、そうですね。ま、とにかくその水着が外れないように気をつけてくださいよ。それでは問題。『東京府』が『東京都』となつたのは第二次大戦後である。さあ行け！」

そう言われた園子は×の方へ走っていた。

「さあ、×へと走っていききましたが…」

そして園子が飛び込む。

「はい、その通り。正解！」

園子はマットから降りると男性挑戦者達に向かって、  
「期待してたみんな、ごめんね」

思わず笑いが起こる。

\*

「じゃあ、次、高明さん！」

そう言われて高明さんが問題を持ってきた。

「それでは行きましょう、問題。紙幣を印刷している大蔵省印刷局。実は宝くじも印刷している。さあ行け！」

そして高明さんが へと向かって走っていく。

「さあ、へと向かっていきましたか…」

のゲートをぶち破った瞬間、高明さんは泥まみれとなっていた。  
「…残念！」

\*

「次は…、そうだなあ…。折角だから東西対決やりたいね」

「じゃ、あたしがやるわ」

そう言っつて手を挙げたのは遠山和葉だった。

「その次は蘭ちゃんがやるんやで」

「え？ 私が？」

思わず声を上げる蘭。

「ハハハ、それは面白いですね。それでは行こう、問題。公職選挙法では『立候補者は白手袋を着用しなければならない』と定められている。さあ行け！」

そして和葉は走り出した。

「さあ、×へと走り出しましたが…、どうだ？」

和葉が×のゲートに飛び込む。

「はい正解！」

そして和葉は勝者の輪の中に入っていった。

「さあ、そうなると次は彼女のご指名で蘭さんですね」

そう言われると蘭は封筒を渡した。

「園子も和葉ちゃんも正解してるしね。私もここで負けるわけには行かないし…」

「果たしてどうかな？ それでは行こう、問題。ソフトボールはもとも室内競技として考えられたスポーツである。さあ行つた！」

そして蘭は躊躇することなく、へと向かって走っていった。

そしてゲートに飛び込む。

「…正解！」

結局この後、服部と新一も正解し、東西対決は引き分けに終わった。

\*

「さあ、次は機内ペーパートップの工藤新一君とわずか1ポイント差、機内第2位の黒羽快斗君です」

そう言われて快斗がやってきた。

「自信の程は？」

「ここでまだ躓くわけには行かないんでね」

「そうですか。…ところで、中森青子さん！」

そう言われ青子が立った。

「これから幼馴染の快斗君が挑戦するけど、やっぱり一緒にハワイに行きたいよね？」

「どっちかって言うと、快斗が泥まみれになる姿が見たいんだけどね」

青子がそう言うと笑い声が起こる。

「大きなお世話だ！」

「ハハハ、まあ期待通りにならないくださいよ。それでは問題。

1896年、第1回アテネ五輪。陸上競技のトラックは今とは逆の右回りだった。さあ行け！」

そう言われた快斗がへと向かって走っていった。

「さあ、へと向かっていったが…、どうだ！」

快斗がゲートに飛び込む。

「はい、その通り。正解！」

\*

こうして40名によるドロンコクイズが終わった。

ところが、である。ドロンコクイズで正解したのは25名しかいなかった。

そう、ここを通過できるのは28名だから、後3つの席が残っているのだ。

そこで、泥のプールに落ちた15名から3名を敗者復活させることになり、その敗者復活戦が行なわれることになった。

ルールはドロンコボール争奪戦クイズ。

問題は数字に関する問題が出され、15名の挑戦者はドロンコプ

ールの中に浮いているボールから正解と思う数字が書かれているボールを取り、正解者が敗者復活、というまたしても泥の海に沈むクイズである。

「それでは第1問。現在のJリーグのチーム数はJ1、J2合わせて何チーム？」

15名が一齐に泥のプールの中に飛び込む。

その中でいち早くさばらさんが「28」と書かれたボールを拾うと高々と掲げる。

スタッフがボールの数字が見えるように水をかける。

「正解は28。おめでとう、さばらさん、敗者復活！」

「第2問。三途の川の渡し賃は何文？」

14人が一齐に飛び込む。

ボールを拾ったのは3人。それぞれ「1」「6」「10」のボールを持っている。

「正解は6文。…ということは、草野ベリーさん、復活！」

「第3問。1776年にアメリカが独立宣言をしたときの州の数は？」

13人が一齐に飛び込んだ。

そんな中、小粒納豆さんが「13」の数字のボールを拾うと高々と上げた。

「正解は13州。おめでとう！ こつぶさん敗者復活！」

\*

「さて、これで28名が決定いたしました。それでは皆さん、ハワイに向かってバンザイ！」

28名の勝者がバンザイをした。

そしてcaviarさんは落ちた12名に向かって、

「それじゃ、グアムの海に飛び込んで泥を洗い落とそうか」

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

そして落ちた12名はグアムの海に飛び込んでいった。

9月×日 第2チェックポイント 失格者12名帰国

（第3チェックポイント・ハワイへ続く）

## 第2チエックポイント・グアム（後書き）

\*

日売テレビスタジオ。

工藤優作「さあ、次はハワイですね。ところでハワイの言葉に『アロハ』と言うのがありますけど、この言葉、って結構いるんな意味があるらしいですね。『こんにちは』と言う意味があったり、人を呼びかけるときに使ったり」

工藤有希子「『さようなら』と言う意味もあるそうですね。…という事で、今日は」

二人「ここまで！」

優「次のハワイは勝ち残った28名の挑戦者のチームワークが試されます。この中で本土上陸をするのは誰か？」

有「しかし、ただでは上陸させません。午前3時にクイズの奇襲攻撃。果たして勝ち残るのは誰か？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

第3チェックポイント・ハワイ（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

### 第3チェックポイント・ハワイ

日付変更線を越え、グアムでの勝者28名はハワイへとやって来た。

ハワイへと付いた翌日、28人はワイキキビーチに立っていた。

「おはようございます!」

例によってcaviarさんの呼びかけで始まった。

「ようやくハワイへとたどり着きました。ここまで来るのに数々の難関を突破してきましたが、中にはね」ここまでたどり着ければ満足だ』って思ってる人もいますよね。…そうでしょう? こつぶさん」

いきなり名指しで呼ばれておどろくこつぶさん。

「そ、そんなことないですよ」

笑い声が起こる。

「…ま、でもね。ここに来るまでに数多くの敗者が涙を飲んでるわけですから、ここらでもう一回気合を入れて頑張ってもらいましょう! さて、ここでのクイズですが…、その前に皆さん」とcaviarさんがスタッフに箱を持ってこさせた。

「今日の皆さんの運勢をおみくじで占ってみませんか?」

「おみくじ?」

思わず目を丸くする一同。

「それではレディファーストと言うことで…、明子さん、どうぞ」

そして明子さんがくじを引くと「未吉」と書かれてあった。

「次に秋桜さん」

そして秋桜さんが引くと「凶」だった。

「お、ラッキー! 大吉だぜ!」

「何だ、中吉か」

「あ〜ん、凶引いちやったよ〜」

こんな悲喜こもこもの展開があった後、

「さて皆さん」

caviarさんが口を開いた。

「同じくじを引いたもの同士で組を作ってください」

そして次のような組が出来上がった（敬称略）。

大吉：新一、園子、白馬、さばら、佐山理人、小粒納豆、ジエーン

中吉：白鳥、和葉、青子、HERMES、草野ベリー、ぴいたあ

ばん、真つ向くじら

末吉：服部、蘭、快斗、明子、とーや、稼頭矢、山崎佳実

凶：高木、中森、目暮、白夜、秋桜、タナトキシ、珠翠月

「さて、ここで行ないますクイズですが…。アレを持ってきて！」

そしてスタッフが持ってきたのはフックが付いた4本のロープと何やら輪のようなものだった。

「何だかわかるね？」

「綱引き？」

「そう、1問多答綱引きクイズです。まずみなさんが全員で力を合わせて綱引きを行ってください。そして後ろに置いてある早押し機に足がかかったチームに私が問題を出します。全員が答えられたらそのチームは一気に勝ち抜け！ 次のチェックポイント、いよいよアメリカ本土、ロサンゼルスへと行きます」

歓声が起こった。

「但し、ここを通過できるのは、2組14名！ しかも敗者復活は無し！」

caviarさんの宣言にざわめく28人。

「さあ、それでは行こう！」

\*

そしてそれぞれ「大」「中」「末」「凶」のゼッケンを胸にし、

7人ずつに分かれた4組が十文字に組まれたロープの上に並んだ。  
「それでは行こう、よいい！」

そしてcaviarさんがホイッスルを吹く。

4組がロープを力の限り引っ張る。

「さあ、ロープが引っ張られますが…、ちょっと末吉組のほうに引っ張られてるようですね」

やがて末吉組のアンカーを担当していた服部の足が早押し機に掛かった。

「それでは、末吉組への問題です。ハワイ州にある8つの島を言いなさい」

快斗「オアフ」ピンポーン

山崎佳実「マウイ」ピンポーン

明子「ハワイ」ピンポーン

とーや「カウアイ」ピンポーン

蘭「アレ？ 何処だったっけ…？」

「どうした？ ど忘れしたか？」

無常にも5秒が過ぎ、制限時間をオーバーしてしまった。

「残念。後の4つはラナイ、モロカイ、ニイハウ、カホオラウエなんです。それでは行こう、よいい！」

そして再び4方向綱引きが始まった。

次は大吉組のアンカー・さばらさんの足が早押し機に掛かった。

「さあ、次は大吉組ですね。それでは問題。2004年開幕時点での日本プロ野球の監督は12名。その名前を言いなさい」

佐山理人「落合」ピンポーン

園子「王さん」ピンポーン

白馬「バレンタイン」ピンポーン

小粒納豆「堀内さん」ピンポーン

新一「伊原春樹」ピンポーン

ジェーン「岡田監督」ピンポーン

さばら「ヒルマン」ピンポンピンポーン

「抜けたー！ 1抜けたー！」

それを聞いた瞬間、

「やったー！」

大吉組の7人が抱き合った。

（ちなみに他の答えは山本浩二、山下大輔、若松勉、伊東勤、梨田昌孝）

そしてロープが1本外され、早押し機の配置も一部変更となり、3組が残された。

「さあ、大吉組が抜けて3組となりました。それでは行こう、よいー！」

そして、大吉組が見守る中、3組による綱引きが始まった。

やがて、凶組のアンカーの高木刑事の足が早押し機に掛かった。

「おっと、次は凶組ですね。それでは行こう、問題。徳川15代の將軍の名前」

中森「綱吉」ピンポーン

珠翠月「家康」ピンポーン

目暮「家光」ピンポーン

白夜「吉宗」ピンポーン

タナトキシ「秀忠」ピンポーン

秋桜「慶喜」ピンポーン

高木「え…？」

高木刑事は他の6人が思いつくものを全部言ってしまったからか、すぐには思い出せず、無常にも5秒が過ぎた。

「残念。あと一人だったのにねえ。他には家綱、家宣、家継、家重、家治、家斉、家慶、家定、家茂といたんですねえ。それでは行こう」

そして凶組が持ち場に帰り再び綱引きが始まった。

「おっと。ようやく中吉組が回答権を得ました」

中吉組アンカーの白鳥刑事の足が早押し機に掛かった。

「問題。解体前のソビエト連邦を形成していた15の共和国は？」

ぴいたあ ぱん「ロシア」ピンポーン

ベリー「ベラルーシ」ピンポーン

くじら「ウクライナ」ピンポーン

HERMES「アルメニア」ピンポーン

青子「リトアニア」ピンポーン

和葉「え？ 何やる…」

無常にも5秒が過ぎた

「残念。他にはカザフスタン、キルギス、ラトビア、エストニア、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、アゼルバイジャン、グルジア、モルドバなんですねえ。それでは行きましょう！」

そして、今度は快斗がアンカーとなつた末吉組が再び回答権を得た。

「さあ、末吉組。今度は決めたいですね。行きましょう、問題。長野県が隣接している8つの県は？」

山崎佳実「群馬」ピンポーン

蘭「岐阜」ピンポーン

服部「埼玉」ピンポーン

稼頭矢「静岡」ピンポーン

明子「愛知」ピンポーン

とーや「富山」ピンポーン

快斗「新潟」ピンポーンピンポーン

「おめでとう、勝ち抜け〜！」

「よーし！」

それを聞いた7名が肩を叩き合いながら勝者席に向かった（ちなみに残り一つは山梨県）。

そして残り14名はビーチにへたり込んだ。

「…なあ、和葉」

服部が和葉に話しかけた。

「…なんや、平次？」

「お前と一緒にロスに上陸したかったな」

「しゃーない、こういうこともあるわ。それに、あの問題はあたしが答えられへんかったのが悪かったんやからな」

「和葉ちゃん…」

蘭が和葉に話しかけた。

「そつだ、蘭ちゃんにこれあげるわ」

そつ言つと和葉が腕にしていたブレスレットを外した。

「これは…？」

「この間アクセサリー屋で買った幸運のブレスレットとかいうヤツ。もうあたしが持ってたつて意味ないしな」

「和葉ちゃん…」

「蘭ちゃん、あたしの分も頑張つてや」

「わかつたわ」

そついうと蘭は和葉のブレスレットを左手にはめた。

「平次、蘭ちゃんのこと頼むわ。それから絶対ニューヨーク行くんやで」

「ああ、和葉のためにも行つてやるわ」

\*

「やれやれ、ここでお別れか」

快斗が青子に言つ。

「ホントはせいせいしてるんじゃないの？」

「バカなこと言うな！」

「それにこつちはお父さんと一緒に帰国だもん。淋しくなんかないわよ。ま、これからもがんばるのよ」

「わかつてるつて」

\*

「さあ、14名が決定いたしました。それではロサンゼルスに向か

ってバンザイ！」

その声に合わせて14人がバンザイをする。

第3チェックポイント 勝者14名決定！

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

ハワイで敗者となった14名がホテルの前に集められた。

「え、皆さん、ご苦労様でした。これから皆さんには空港へ向かってもらうわけですが、私からのプレゼントを差し上げたいと思います」

caviarさんはそう言うとはやら地面に置かれてある物の力バーをどけた。

「え？」

思わず目を丸くする14人。

そう、そこにはムカデ競争などに使う長下駄があったのだ。

「もうお分かりですね。これを履いて空港まで歩いて帰ってもらいましょう！」

そして14人が長下駄を履き、おのおのが前にいる人の肩に手を掛ける。

「せーの！ 1、2、1、2…」

掛け声を掛けながら一列になつて歩いていく14人。

果たして彼らが無事に空港にたどり着けたかどうか定かではない、…なんてね。

9月 日 第3チェックポイント 失格者14名帰国

（第4チェックポイント・ハワイPART2へ続く）

第4チェックポイント・ハワイPART2（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第4チエックポイント・ハワイPART2

明日はいよいよロスへ上陸、と言うことからか14人はその夜遅くまで起きていて、最後の挑戦者が寝たのは既に日付が変わった夜中の1時だった。

午前3時を少し回った頃だった。

不意に部屋をノックする音がした。

寝ぼけ眼でドアを開ける快斗。

「…ふん、なんですか？」

「おはよう、これからクイズをやるぞ」

caviarさんが小声で話しかける。

「え…？」

何事か、と同じ部屋にいた稼頭矢さんも顔を出した。

「さあ、早く起きて。1階のロビーで待ってるよ」

\*

それから十数分たった頃。

ホテルの1階のロビーには14人が横2列になって揃っていた。

「さて、いよいよロサンゼルスに上陸しますが、皆さん、アメリカについての勉強はしてますか？」

caviarさんが小声で話しかける。

「…これから xクイズを出します。問題を読み上げますので正解だと思っ かxかの札を顔の前に上げてください。1名の敗者が出るまで問題が出ます。それでは問題。アメリカ合衆国の50州は海に面していない州の方が多い。 かxか？」

5秒後、

「ホールドアップ！」

14人がそれぞれ「x」の札を自分の顔の前に上げる。

「はいそのまま。答えは…」

と、14人の後ろで「」の旗が揚がった。

「…?」

何が起こったのかわからないままの14人。

「…みなさんには正解がわかりません。それでは次の問題。アメリカで初めて女性知事が誕生したのは第二次大戦後である。か×か?」

5秒後、

「ホールドアップ!」

14人がそれぞれ「」の札を自分の顔の前に上げる。

「答えは…」

14人の後ろで「x」の旗が揚がった（戦前の1925年、ワイオミング州で誕生）。

「問題。日本の旅客機が羽田から初めて外国へ飛んだときの行き先はニューヨークだった。か×か?」

5秒後、

「ホールドアップ!」

14人がそれぞれ「」の札を自分の顔の前に上げる。

「答えは…」

14人の後ろで「x」の旗が揚がった（サンフランシスコ行きが最初）。

「…はい、おろして下さい。只今敗者が決定いたしました。結果は空港でお教えいたします。それではお休みなさい」

14人は首をかしげながらその場から解散した。

\*

朝、ホノルル国際空港。

14人が空港に到着した。

「おはようございます。えー、それでは只今からロサンゼルス行き航空券を渡します」

そしてcaviarさんが14人に航空券を渡した。

「それでは中に航空券があるかどうか確認してください」  
そして14人が中をあらためた所、

「…ねえちよつと！」

園子の声がした。

「どうしたの、園子？」

蘭が聞いた。

「何で私の航空券だけ行き先が『TYO』なの？」

そう、他の13人の航空券は行き先が「LAX」（ロサンゼルスのこと）だったのに、園子の航空券だけは行き先が東京を意味する「TYO」だったのだ。

「そう、鈴木園子さん、あなたが敗者です」

caviarさんが言う。

「え〜っ！」

「あなただけだったんですよ、全問不正解だったのは」

「そんな〜！」

思わずその場にへたり込む園子。

第4チエックポイント 勝者13名決定！

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

「さて、園子さんへの罰ゲームですけど…。実はあなたの荷物、ひとつ前の便で既に日本に送り返しているんですよ」

「え？ 本当」

「ええ。という事ではあなたにはその荷物を受け取りに行ってもらいましょう」

園子は13人が見送る中、「東京直行」と書かれたマントを羽織り、成田へと向かう飛行機が待つゲートへと向かっていった。

成田空港で待っているであろう、自分の荷物と再会するために。

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

9月 日 第4チェックポイント失格 鈴木園子 帰国

#### 第4チエックポイント・ハワイPART2（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「さあ、いよいよ本土上陸者が決定いたしました！ 次のロサンゼルスは…、つて有希子？ 有希子、何処にいるんだ？」

そう、さっきまで隣にいた有希子がいなかったのだ。

????「何か私に御用ですか？」

いつの間にやら優作の隣に眼鏡をかけた恰幅のいい女性が立っていた。

優「有希子、そこで何やってんだ？」

江戸川文代「私、工藤有希子ではありません。江戸川コナンの母親の江戸川文代です」

優「いや、有希子。母親…、つてもしかして次のチエックポイントは？」

文「その通り。コレがヒントです」

優「そうですか。さあ、それでは参りましょう！」

文「と言う所なんです、今日はここまで」

優「あらま、そうですか。さあ、本土上陸をしますます激しくなるクイズバトル！」

有希子「（いつの間にか変装を解き）果たしてこの激戦を制するのは誰か？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

**第5チェックポイント・ロサンゼルス（前書き）**

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第5チエックポイント・ロサンゼルス

アメリカ西海岸にある全米第2の都市・ロサンゼルス。

グアム・ハワイと経由し、ついにCNRウルトラ軍団はアメリカ本土へと上陸した。

ここでもう一度25000人以上の挑戦者の中から本土上陸を果たした13人を紹介しよう。

「名探偵コナン」キャラからは工藤新一、服部平次、毛利蘭の3名。「まじつく快斗」キャラからは黒羽快斗と白馬探の2名。

そしてCNRからはさばらさん、山崎佳実さん、ジェーンさん、佐山理人さん、小粒納豆さん、明子さん、とーやさん、稼頭矢さんの8名。

…というそうそうたるメンバーである。

さて、ロサンゼルス、といえば「映画の都」ハリウッドが有名だが、そのハリウッドのある広場でアメリカ上陸後、最初のクイズが行なわれることになった。

\*

「いよいよアメリカ本土へと上陸しました。ここまで勝ち残ることが出来たのはあなた方13名だけです」

caviarさんが前7台、後6台が並んだ早押し台に腰掛けている13人に話しかける。

「さて、今日はですね、ゲストをお呼びしてあります。さあいらっしやい」

その声に呼ばれて15人の6〜7歳くらいの少年少女が出てきた。「可愛いねえ…、実は彼らはこの近くにある小学校に通う子供達です。…となればもうお分かりですね。ここで行ないますクイズは」

クイズ・私がママよ』。まず、2ポイント先取の早押しクイズを出します。お手つき、誤答は1回休みとなります。そして2ポイント獲得したら15人の子供たちの中から好きな子供を一人選んでください。その子がお母さんの似顔絵を持って出てきますので、似顔絵からその子のお母さんが誰なのか、あちらにいる15人の中から推理して下さい」

caviarさんが指した方向には15人の母親が椅子に腰掛け  
ていた。

「見事正解したら勝ち抜け、不正解の場合はポイントがゼロに戻り、最初からやり直しです。ここを勝ち抜くことが出来るのは10名、次はモハーベ砂漠へと行きます。それでは行きましょう、ボタンに手を掛けて」

そして13人がボタンに手をかけた。

「問題。ロサンゼルスを本拠地に行っている野球チームと言ったらドジャースですが、ではそのドジャースがロサンゼルス…」

ポーン！

「工藤君！」

「ニューヨークのブルックリン」

「正解！ ……そのドジャースがロサンゼルス移転前に本拠地に行っていたのはニューヨークの何処？ ……正解はブルックリンです。次の問題。リンカーンが『人民の人民による人民のための政治』と演説したのは何処？」

再び新一の早押しハットの「？」マークが立ち上がった。

「工藤君」

「ゲティスバーグ」

「正解！ さあ、早くも工藤君が2ポイント獲得しました。工藤君、好きな番号を選んで」

「8番」

「8, please」

そして胸に「8」の番号を付けた子供が母親の似顔絵で顔を隠し

て出てきた。

新一はその似顔絵と母親を見比べている。

「…よく特徴を掴んでますねえ…。考える時間は30秒、工藤君、決まったかな？」

新一は軽く頷くと、

「11番」

「11, please」

そして母親が出てきた。

「さあ、聞いてみようか」

「Are you my mommy?」

「Yes, I'm your mommy」

「よし！」

新一がガッツポーズをする。

「鮮やか！ たった2問で1抜け！」

そして新一がcaviarさんの隣に来た。

「いや、よくわかったね」

「ええ、よく特徴を掴んでましたよ」

そして新一はいち早く勝者席に行った。

\*

「問題。プロ野球チームのマスコット。巨人はジャビットくん。では横浜は？」

服部とさばらさんがほぼ同時にボタンを押したが、一瞬の差でさばらさんが回答権を得た。

「さばらさん」

「ホッシー君」

「正解！ さあ、これでさばらさんが2ポイント取りました。さばらさん、何番を選びますか？」

「12番」

「12, please」

今度は女の子が出てきた。

「…さあ、さばらさん。何番を選びますか？」  
「…6番」

「6, please」  
それを聞いた途端、勝者席の新一と回答者席の服部、そして白馬の3人が「え？」と言う顔をした。

「それでは聞いてみようか」

「Are you my mummy?」

「I'm not your mummy」

思わずさばらさんが天を仰ぐ。

「残念。0ポイントに戻りました。それでは行こう、問題。人形劇ドラマ『サンダーバード』はもともと何処の国の…」

今度は服部の早押しハットが立ち上がった。

「服部君！」

「イギリス」

「正解！ 『…どこの国のテレビ映画でしょう？』 正解はイギリス。それでは行こう。何番を選びますか？」

「12番」

「12, please」

さばらさんが選んだ女の子がもう一度出てきた。

「何番を選びますか？」

服部は自分の考えに確信を得ているかのように、

「1番」

「1, please」

そして母親が来た。

「それでは聞いてみようか」

「Are you my mummy?」

「Yes, I'm your mummy」

「よっしゃー！」

「おめでとう、服部君、勝ち抜けだ！」

服部が勝者席にやってきた。

まずは新一とハイタッチを交わすと、勝者席に着き、

「なあ工藤」

「何だ？」

「お前、オレが当てたヤツ、最初からわかってたやろ」

「ああ。さばらさんが6番を選んだとき意外に思ったんだけどな」

「じゃあないわ。結構似てるとこあったからな」

\*

そしてクイズは進み、さばらさん 快斗 蘭 とーやさん 白馬

佐山理人さん ジェーンさんの順で勝ち抜け、山崎佳実さん、小

粒納豆さん、明子さん、稼頭矢さんの4人が残った。

今のところは明子さんと稼頭矢さんがそれぞれ1ポイントずつ取  
っており、一歩リードしていた。

「問題。漫画の台詞の部分を何という？」

明子さんの早押しハットが上がった。

「明子さん！」

フキダシ

「正解！ …さあ、何番を選びますか？」

「4番」

「4 , please」

似顔絵を持った男の子が出てきた。

「何番を選びますか？」

「5番」

「5 , please」

そして母親がやってきた。

「それでは聞いてみようか」

「Are you my mummy？」

「I'm not your mummy」

思わず顔をしかめる明子さん。

「さあ、これで稼頭矢さんが1ポイント、後の3人が0となりまし

た。問題。将棋、チェス、オセロ。次のうち、升目の数が奇数なのは？」

稼頭矢さんの早押しハットが立ち上がった。

「稼頭矢さん！」

「将棋」

「正解！ さあ、今度こそ当てたいね。何番を選びますか？」

「4番」

「4, please」

稼頭矢さんも明子さんと同じ男の子を選んだ。

「何番を選びますか？」

「8番」

「8, please」

そして母親が来た。

「それでは聞いてみようか」

「Are you my mommy？」

「Yes, I'm your mommy」

「やったー！」

「おめでとう、稼頭矢さん、勝ち抜け！」

そして稼頭矢さんが10人目の勝者となり、勝者席へと向かった。その瞬間、敗者となってしまった3人は呆然としていた。

と、その時だった。

「いや、君たち残念じゃったな」

突然阿笠博士が現れた。

「…阿笠博士、何でこんなところにいるんですか？」

こつぶさんが聞く。

「いや、caviarさんにここにきてくれ、と呼ばれたんじやが…」

「よく来ていただきました、阿笠博士。実はですね。彼女たち3人の中から1人を復活させようかと思うんですが」

「それはいい考えじゃな」

「決まりました。それでは敗者復活戦を行ないます！」

3人の顔がほころぶ。

「問題は『二重音声クイズ』です。私と阿笠博士が同時に問題を読みます。わかった方は早押しボタンを押してください。両方の答えが正解だったら1ポイント。2ポイント取った1名が敗者復活となります。それでは行きましょう。問題」

（以下の問題は二人が同時に読んでます）

c「上野 札幌間を結ぶ夜行寝台特急の愛称は？」

阿「北極星を探す目印となる大熊座の7つの星は？」

ピンポーン。

「山崎さん！」

「北斗星と北斗七星」

「正解！ 問題」

（以下の問題は二人が同時に読んでます）

c「ゴジラが口から吐くのは何の炎？」

阿「ゴジラこと松井秀喜の所属チームは？」

ピンポーン。

「こつぶさん！」

「ヤンキースと放射能」

「正解！ 問題」

（くだいようですが実際は二人が同時に読んでます）

c「ゴメンね〜 素直じゃなくて この曲のタイトルは？」

阿「体操競技で使う『月面宙返り』を英語で言つと？」

ピンポーン。

「山崎さん！」

「『ムーンライト伝説』とムーンサルト」

「正解、勝ち抜け〜！」

それを聞いた瞬間、山崎さんが何ともいえない笑顔を見せた。

「よかつた〜」

「おめでとう！」

先に勝ち上がった蘭とジェーンさんの二人が山崎さんを迎えた。

「さあ、それでは11名が決定いたしました。次のチェックポイント、モハーベ砂漠に向かってバンザイ！」

モハーベ砂漠行き11名決定！

\*

明子さんと小粒納豆さんの二人にcaviarさんが近付いた。

「…こつぶさん、今回の旅はどうでした？」

「正直グアムあたりで落ちるかな…、と思ってたんですけど、ここまで来られるなんて思いませんでした」

「…明子さんは？」

「短い間だったんですけど、皆とますます友達になることが出来てよかったですと思います」

「そうだね。ここで知り合った友達はとっても大事な友達なんだから、これからも大切にしてくださいね」

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

小粒納豆さんと明子さんが連れてこられたのは何やら美容院のような所だった。

そこには二人の男性が立っていた。

「…こちらの方はハリウッドで製作される数々の映画で特殊メイクを担当されている方です」

「え？ それじゃ…」

「そう、あなた方の罰ゲームは、ここでこの二人に特殊メイクをしてもらってそのまま空港へと帰ってもらいます！」

そして二人が椅子に座ると、二人の男は小粒納豆さんと明子さん

の顔に特殊メイクを始めた。

果たして二人がどんな特殊メイクをされたのか…。本人からのク  
レームが怖いので（おい！）ご想像にお任せします。

9月 日 第5チェックポイント失格 小粒納豆、明子 帰国

（第6チェックポイント・モハーベ砂漠へ続く）

## 第5チェックポイント・ロサンゼルス（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「うーん、お二人にはもう少し頑張つて欲しかったんですけどねー」

工藤有希子「お二人の姿が見えなくなつた所で…」

優「今日はここまでのようですね。さあ、いよいよ次はモハーベ砂漠」

有「見渡す限りの大砂漠で繰り広げられるのは勿論あのクイズ！」

優「果たして勝ち残るのは誰か？」

有「そして栄えあるクイズ王の栄冠は誰の頭上に？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

**第6チェックポイント・モハーベ砂漠（前書き）**

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第6 チェックポイント・モハーベ砂漠

カリフォルニア州とアリゾナ州の州境近くにある砂漠、モハーベ砂漠。

ここにロサンゼルスとの激戦を勝ち抜いた11名が集まっていた。空は雲ひとつない青空で、気温の方も優に30度は超えているだろう。

「さて、ここで行ないますクイズですが…、アレを見る！」

caviarさんが空を指差す。

その方向を眺める11人。

おおっ、と歓声上がる。

爆音が聞こえてきて1台のヘリコプターが飛んできたのだ。

「そう、ここで行なうのはバラマキクイズだ。今からあのヘリコプターから問題をばら撒く！ 皆さんはあそこまで走って行って問題を拾ってここまで戻ってきて、問題に答えます。2ポイント先取で勝ち抜け！ 但し、問題の中にハズレが20%あるのでハズレを引いた場合はもう一度取りに行ってくること！ 落っこちるのは1名ここを抜けると次はグラウンドキャニオンに行きます！」

拍手と歓声が聞こえる。

「さあ、それでは一列に並んで」

そして11人が横一列に並んだ。

それを待っていたかのように色とりどりの封筒がヘリコプターからばら撒かれた。

「用意、スタート！」

その声を合図に11人が一斉に駆け出した。

やがて封筒を持って一番初めに戻ってきたのは服部だった。

「お、服部君。早いね」

そして服部が封筒をcaviarさんに渡す。

「いきなりハズレだったらどうする？」

「それは勘弁して欲しいわ」

そしてcaviarさんが封筒を開く。

「よかった。問題が入ってたよ。それでは行こう、問題。『朕は  
国家なり』と言ったのはルイ何世？」

「14世」

「正解！」

それを聞いた服部は問題を取りに駆け出していった。

「次は稼頭矢さんですね」

そう言われて稼頭矢さんが封筒を渡す。

「それでは行こう、問題。ピタゴラスの定理に関係があるのは丸・  
三角・四角のうちどれ？」

「三角！」

「正解！」

そして稼頭矢さんが走り出した。

「次は白馬君です」

そして白馬が封筒を渡す。

「問題が入ってるっていいんですが…。この文字を何と読む！」

そしてcaviarさんは「ハズレ」と書かれた紙を白馬に見せ  
る。

それを見た白馬は走り出していく。

「次はジェーンさんです」

そしてジェーンさんが封筒を差し出す。

「ハズレじゃないといいんですけど」

「そうだね、白馬君が今拾ったからね。…大丈夫、問題があったよ」  
それを聞いたジェーンさんが安堵の表情を浮かべる。

「問題。19歳・33歳・42歳。このうち男性の厄年は？」  
「42歳」  
「正解！」

「とーやさん、いらっしやい」  
「とーやさんが戻って来た。」

「それでは行こう、問題。ピアノ曲『ムーンライト（月光）』を作  
曲したのはベートーベン。では『ムーンライト・セレナーデ』を作  
曲したのは？」

「え…、誰だろう？」  
5秒後、

「正解はグレン・ミラー。さあ言って来い！」  
そしてとーやさんは再び駆け出した。

「…やつと来たね、工藤君」  
新一が問題を持って戻ってきた。

「あんまり急いでも仕方ないでしょう」

「まあ確かにそうだね。では行こう、…問題。『智に働けば角が立  
つ、情に棹差せば流される』と書かれている夏目漱石の小説の題名  
は？」

「草枕」

「正解！」

\*

そして11人全員がとりあえず一巡した。正解は6人、不正解が  
3人、白馬とさばらさんがハズレを引き、もう一度取りに行った。

服部が戻ってきた。

「さあ、服部君。リーチが掛かってるよ。これで勝ち抜けを決める  
かな？」

そしてcaviarさんが封筒を開ける。

「…問題。江戸川乱歩の小説『怪人二十面相』に出てくる『少年探偵団』のリーダーの名前は？」

「小林芳雄！」

「正解！ 1 抜け〜！」

「よっしゃあ！」

そして服部が勝者席に行った。

\*

「白馬君、いらっしやい」

そして白馬が封筒を差し出す。

「いや、さっきはハズレでしたからね。今度は問題が出ると言いのですが」

「そうだといいいね」

そしてcaviarさんが封筒を開く。

「残念でした。またハズレ！」

思わず自分の目を疑う白馬。2回連続で「ハズレ」を引いてしまったのだ。

\*

「稼頭矢さん、いらっしやい」

稼頭矢さんが封筒を差し出す。

「どうだい？」

「いや〜、砂漠を走るのって思ったより大変ですね」

「そうか。じゃ、もう一回走ってもらおうか？」

caviarさんが差し出した紙には「ハズレ」と書かれてあった。

「頑張つて！」

稼頭矢さんの次に並んでいた蘭が声をかける。

「じゃ、蘭さん、行こうか」

蘭が封筒を差し出す。

「蘭さんもリーチが掛かっていますからね。…問題。『ヘリコプター』『コザック』などの技があるスキー競技は何？」

「モーグル！」

「正解！ 勝ち抜け〜！」

そして蘭が勝者席に向かう。

\*

ジェーンさんが肩で息をしている。

「…ジェーンさん、大丈夫かい？」

「いえ…、大丈夫です」

「そうかい。では行こう…、問題。ドライアイスとはどんなガスを固体にしたもの？」

「二酸化炭素」

「正解、勝ち抜け〜！」

それを聞いたジェーンさんは大きくため息をついた。

そして勝者席へと向かった。

\*

「問題。ことわざで嘘から出るのはまこと。ではひょうたんから出るのは？」

「駒」

「正解、勝ち抜け〜！」

「問題。F1日本グランプリが開催される鈴鹿サーキットは何県にある？」

「三重県」

「正解。勝ち抜け〜！」

…と、この調子で次々と勝者が決まり、佐山理人さん、さばらさん、そして白馬探の3人が残った。

現在のポイントは3人とも1ポイント。後1ポイント取れば勝ち抜けとなる状態だった。

残った3人で一番最初に戻ってきたのは佐山理人さんだった。

「大丈夫かい？」

「まだ大丈夫ですよ」

「そうかい。それじゃ行こうか」

caviarさんが封筒を開く。

「問題」

それを聞いて思わずホツとする佐山さん。

「WWF・世界野生動物基金のシンボルマークとなっている中国の動物は？」

「パンダ」

「正解。勝ち抜け〜！」

それを聞いた佐山さんは大きいため息をつくと勝利者席に向かっていく。

そして、さばらさんがやって来た。

「さあ、残る席は後一つだ。決めたいね〜」

「はい」

「それでは行こう」

そして封筒を開く。

「問題。映画『ビルマの豎琴』で日本兵とイギリス兵が一緒に歌う

『埴生の宿』の英語名は？」

「え？」

思わず言葉に詰まるさばらさん。あっという間に5秒が過ぎ、

「正解は『ホーム・スイート・ホーム』。さあ行け！」

それを聞いたさばらさんが問題を取りに行く。

「さあ、白馬君。チャンスだ！」

そして白馬が封筒を差し出す。

「果たしてこれで決まるかな…？」

caviarさんが封筒を開く。

「君はよほど『ハズレ』に好かれてるようだね！」

またまた「ハズレ」を引いた白馬は天を仰いで駆け出していった。

「さあ、これで決まるかな？」

さばらさんが戻ってきて、封筒を差し出す。

「よかった、問題があったよ。さあ問題。『ドレミの唄』で『シ』は何の『シ』？」

「しあわせの『シ』」

「正解。勝ち抜け〜！」

それを聞いたさばらさんがガッツポーズをする。

一方、それを聞いた白馬は全身の力が抜けたか、座り込んでしまった。

「皆さん、この暑い中お疲れ様でした。さあ、それではグランドキヤニオンに向かってバンザイ！」

グランドキヤニオン行き10名決定！

\*

「…お疲れ様」

cavivarさんが白馬に近付いた。

「どうだった？」

「まさか、こんなところで落ちるとは思わなかったですよ」

「何だか君はハズレばかり拾ってたからねえ…」

「…20%しかないはずなのに…」

「確率つてのはそんなもんだよ。じゃあ、罰ゲームやるつか」

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

「白馬君、ちよつとスーツケースの中身を見せて」

そう言うとcavivarさんは白馬のスーツケースを開けた。

「ほお、いろいろあるんだねえ…」

するとcavivarさんはスーツケースからトレーナーやらジャケットやらを取り出した。

「白馬君、これを着て」

「え？」

「君への罰ゲームは着られるだけ服を着て、空港まで歩いて帰るとだ」

\*

そして数分後、着られるだけの服を着てみているだけで暑苦しい格好になった白馬がバスの中から出て来た。

「それじゃ、気をつけて帰るんだよ」

そして白馬は歩き出した。

「…なんでボクがこんな目にあわなきゃいけないんだ…」  
そう呟きながら汗まみれになって白馬探はモハーベ砂漠から帰っていった。

9月 日 第6チェックポイント失格 白馬探 帰国

（第7チェックポイント・グラントキャニオンへ続く）

## 第6チエックポイント・モハーベ砂漠（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「しかし白馬君も運がなかったですね」

工藤有希子「まあ、暑い砂漠の激闘でしたからね。挑戦者達もこの後で飲んだ水は美味しかったでしょうね」

優「水？ 水と言えば水入り。と言うことで」

二人「今日はここまで！」

優「さあ、次はいいよグラランドキャニオン」

有「大峡谷に響く挑戦者の雄叫びとは？」

優「ますます目が離せなくなるクイズバトル！」

有「果たして勝負の行方は？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

第7チェックポイント・グラントキャニオン（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第7チェックポイント・グランドキャニオン

何千万年と言う時間をかけて大地が侵食をして作り上げた大自然の芸術、とても言うべきところ・グランドキャニオン。  
今、ここに10人の挑戦者がやってきた。

「さて、ここで行ないますクイズですが…、こういう景色を見ると大声を上げて日頃のストレスを発散したいでしょう？」

「え？ もしかして…」

「そう、ここで行ないますクイズは大声クイズです！」

そして、グランドキャニオンの一角に並べられた早押しボタンがなく、挑戦者の右側に声の大きさを示すゲージがついた早押し台に10人が立った。

「…ところで服部君」

caviarさんが一番左端の早押し台にいる服部に話しかける。

「はい？」

「今一番帰って欲しい人物は誰ですか？」

「やっぱり工藤のヤツやな」

「よし、決まり。『工藤、帰れー！』」

笑い声が起こる。

「山崎さん」

「はい」

「確かCNRで一番最初にコナンキャラと作家さんのコラボレーション小説を書いたのはあなたでしたよね」

「はい」

「ということはあなたが元祖、というわけですね。…それじゃこれで行きましょう。『私が元祖ー！』」

「蘭さん」

「はい」

「そういえば、お父さんの小五郎さんはドームで落ちたんですよね？」

「はい」

「今頃心配してるんじゃないかな？」

「そんなことはないと思うんですけどね」

「それじゃこれで行こう。『お父さん、心配しないで！』」  
思わず苦笑いを浮かべる蘭。

「とーやさん」

「はい」

「なんだか運だけで勝ち残っている、とみんなに言ってるそうですね」

「いや、ホントにここまで来れたのは運ですよ」

「でもそれも実力じゃないですか？　ということで『運も実力のうち！』」

「佐山さん」

「はい」

「先日、CNRの作家さんに『挿絵を描かせて欲しい』と言ったそうですが」

「ええ。でも何人かから好感触があったのでよかったですよ」

「じゃあ、これで行きましょうか。『挿絵を描かせて！』」

「さばらさん」

「はい」

「さばらさんは『野球に関する話』を連載していたこともあって相当野球にはお詳しいようですね」

「ええ、野球だったらプロ野球でもMLBでも高校野球でも何でも  
いいです」

「じゃあこうしましょう。『野球の問題を出せ！』」

「工藤君」

「はい」

「…あんなことを服部君が言ってましたが…」

「いや、服部のヤツには昨日、夜食代わりのハンバーガーおごつて  
るんで、その分返してもらわないうちには帰るわけには行きません  
よ」

「じゃあ、これで行きますか？ 『服部、帰れー！』」

「あ、いいですね」

思わず「おいおい…」という顔を服部がする。

「ジエーンさん」

「はい」

「ジエーンさんはCNRでいろんなジャンルの小説を描く上、挿絵  
もご自分で書かれますよね」

「ええ。私は自分が書きたいジャンルの話が数多くあるので」

「そうですね、じゃ、こうしましょう。『何でも書きます！』」

「快斗君」

「はい？」

「この旅で気づいたんですけど、快斗君、全然魚料理食べないね」

「いやあ、魚が嫌いなもんで」

「よし、『魚料理は嫌いだ！』」

「え…」

思わず絶句する快斗。

「稼頭矢さん」

「はい」

「この稼頭矢、という名前ですけど…。結構間違える方がおられるようですね」

「ええ。でも松井稼頭央選手のおかげで間違える人は少なくなってますし、面倒だったらひらがなでもいい、と言ってますし」

「でもやっぱり間違えられると困るでしょうね。と言うことで『名前間違えないで！』」

「ははは…」

…と、この調子で10人の叫ぶフレーズが決まった。

「それではクイズを始めます。クイズの答がわかったら、早押しボタンを押す代わりにマイクに向かって大声で叫んでください。3ポイント先取、お手つき・誤答は1回休み。ここを通過できるのは8名。ここを抜けますと次はダラスへと行きます。それでは行きましよう」

それを聞いた10人がマイクの前にスタンバイする。

「問題。ここ、グランドキャニオン上流のレイクパウエルでロケが行なわれた、衝撃のラストが話題となったSF映画は？」

次の瞬間、

「工藤、帰れー！」

「運も実力のうちー！」

「野球の問題を出せ！」

「服部、帰れー！」

「魚料理は嫌いだ！」

等といった大声が響いた。

その迫力に女性陣は圧倒されてるようだ。

そんな中、回答権を得たのは意外、とっては失礼だがさばらさんだった。

「はい、さばらさん」

「猿の惑星」

「正解！」

\*

「問題。味の素スタジアム、Yahoo！ BBスタジアムといった球場などの命名権を企業に売却することを英語でなんと云う？」

「お父さん、心配しないで！」

蘭が叫び、早押しハットが上がる。

「蘭さん！」

「ネーミングライツ」

のどが枯れたか、蘭の声は少々がらから声だった。

「正解！」

それを聞いた蘭が「ふうっ…」とため息をついた。

「…蘭さん、大丈夫ですか？」

「いえ、大丈夫です」

「そうかい。でも声が枯れてるよ」

\*

「問題。寝台券・特急券・普通乗車券。このうち、JRの子供運賃が半額にならないのは？」

「名前間違えないで！」

「はい、稼頭矢さん！」

「寝台券」

「正解。1抜け〜！」

「よし！」

そして稼頭矢さんは勝利者席に向かう。

「いや〜、CNRの作家さんで初めての1抜けですね。それでは行こう、問題。『フック』『ウエンディ』『ティンカーベル』といったら、何の話の登場人物？」

「運も実力のうち！」

「はい、とーやさん」

「ピーターパン」

「正解、勝ち抜け〜！」

それを聞いたとーやさんがガッツポーズをする。

「さあ、2番目の勝ち抜けもCNRの作家さんだ。皆さん、頑張つて！ さあ、それでは問題。熱狂のあまり、騒動を引き起こす過激なサッカーファンのことをなんと云う？」

「服部、帰れー！」

「工藤君！」

「フリーガン」

「正解！ さあ、これで服部君と工藤君にリーチが掛かりました。問題。『四六時中』と言ったら何時間のこと？」

「工藤、帰れー！」

「服部君！」

「24時間」

「正解、抜けたー！」

その瞬間新一が複雑な表情をした。これで2回連続で服部に先を越されたのだから。

「さあ行こう、問題。南洋に浮かぶ架空の島・インフアント島の守護神である蛾の怪物といえは？」

「服部、帰れー！」

既に通過した人間に対し「帰れ」というのも何だか変だが、決まりだから仕方ない。

「工藤君」

「モスラ」

「正解、抜けたー！」

ようやく勝ち抜けた新一は一つため息をつく。勝者席に向かった。

\*

「問題。日本で一番距離が長い国道は何号線？」

「魚料理は嫌いだ！」

「快斗君」

「4号線」

「正解。勝ち抜け！」

「問題。童謡『七つの子』でカラスは何と鳴く？」

「お父さん、心配しないで！」

「蘭さん」

「かわいかわい」

「正解、抜けたー！」

「問題。東京の名所で『日本電波塔』と言ったら何？」

「野球の問題を出せ！」

「さばらさん」

「東京タワー」

「正解。勝ち抜け！」

と7人が抜け、残ったのは山崎佳実さん、ジェーンさん、佐山理人さんの3人となった。

ポイントは佐山さんが2ポイント、残り2人が1ポイントだった。

「さあ、いよいよ残った席は一つです。行くぞ、問題。古代エジプトで守護神として最も多くに人に崇拜されていた動物といえば？」

「挿絵を描かせて！」

「佐山さん！」

「鷲」

「残念、答えはネコです。佐山さんは次の問題、1回休みです。では問題。放送衛星の略称はBS。では通信衛星の略称は？」

「私が元祖！」

「はい、山崎さん」

「CS」

「正解。さあ、山崎さんもリーチが掛かった。では以降、問題。古希と言ったら70歳。では、白寿と言ったら何歳？」

「挿絵を描かせて！」

「私が元祖！」

「何でも書きます！」

3人がほぼ同時に叫んだが、早押しハットが上がったのは山崎さんだった。

「山崎さん」

「99歳」

「正解、抜けたー！」

そして山崎さんは勝者席に向かった。

「いやあ、皆さん本当に大声出して疲れたでしょう。でも、あと一回だけ大声を出してくださいね」

それを聞いた8人から失笑が起こる。

「さあ、それではダラスに向かってバンザイ！」

ダラス行き8名決定！

\*

「：どうでした、佐山さん」

「本当に、ここまで来ることができなんて思いませんでした」

「：ジエーンさんは？」

「正直、成田で落ちた時はもう駄目かと思ったんですけど、敗者復活してここまで来ることができたのですから満足です」

「：そうかい、一寸後ろを見て下さい」

そう言われて後ろを見る二人。

二人の目の前には何処までも続く大峡谷が広がっていた。

「：おそらく今日、あなた達二人がここで見た光景は一生の思い出に残るでしょうね」

そして、二人が大きなことをなし終えたかのような笑顔を浮かべた。

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

二人が連れて行かれたのは何やら広場のようなところだった。

「…ここで何をやるんですか？」

ジェーンさんが聞く。

「実はですね、今日これから先住民族のショーがあるらしいんですけどね」

「…それを見るんですか？」

佐山理人さんが聞く。

「見るだけじゃ罰ゲームにならないでしょ？ お二人にそのショーに出演していただきます」

「え？」

思わず絶句する二人。

そして二人は担当者から徹底的に指導をされて、ショーのダンスの振り付けを叩き込まれた。

ショーが始まり、二人の出番となった。

先住民族の衣装を来た二人がステージに出てきた。

何とか自分の出番を終わらせた二人に拍手が送られる。

そして二人は退場した。

その背中には「東京直行」と書かれていた。

9月@日 第7チェックポイント失格 ジェーン、佐山理人 帰国

（第8チェックポイント・ダラスへ続く）

## 第7チエックポイント・グランドキャニオン（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「さあ、いよいよロッキー山脈を越えて次はダラスとなります！」

工藤有希子「……ですが、挑戦者たちがロッキー山脈を越えるのに少々時間が掛かっているようなので、今日はここまで！」

優「またまたあ……。さあ、次のチエックポイントはテキサス州・ダラス」

有「テキサスの大地で挑戦者達が疾走します！」

優「果たしてこの激戦を勝ち抜くのは誰か？」

有「そしてクイズ王は誰になるのか？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

**第8チェックポイント・ダラス（前書き）**

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第8チエックポイント・ダラス

ロッキー山脈を越え、挑戦者8人はテキサス州ダラスへとやってきた。

この地は「JFK」ことケネディ大統領暗殺の場所としても有名であり、ケネディ暗殺の日が日本とアメリカを結ぶ衛星生中継最初の日だった、というのも何かの皮肉だろうか。

さて、会場に集まった8人を前にしてcaviarさんが話しかける。

「さて、皆さん。ここで優勝賞品を発表したいと思います。皆さんへの優勝賞品ですが、ロッキー山脈の麓にあるログハウスを差し上げます。ここに権利書があります」

そう言うつとcaviarさんは権利書を取り出した。  
「これにサインをすれば、その時点でログハウスは優勝者のものとなります」

それを聞いた8人がざわめく。

「さて、ここで行ないますクイズですが、あれを見る！」

そしてcaviarさんが指差すと8つの早押しハットが付いた車がトラックに引かれてやってきた。

「まさか…」

「そう、ここで行なうクイズはマラソンクイズです。問題を出すのでわかった時点で早押しボタンを押して問題に答えてください。お手つき、誤答は1回休み。3ポイント先取で勝ち抜けとなります。

そしてここで落っこちるのは1名。ここを抜けますと次はニューヨークリンズへと行きます。さあ、一列に並んで」

そういわれて8人の挑戦者は早押し機の前に一列に並んだ。

そしてcaviarさんが早押し機を積んだ車に乗る。

「よい、スタート！」

そして車が走り出し、8人がそれについて行くに走り出した。

\*

車が大通りに出た（勿論このクイズのためにわざわざ通行止めにしてもらった）ところでクイズが始まった。

「それでは行こう、問題。ここ、テキサス州の州旗にもなっている一つ星を何と言う？」

ポーン！

「工藤君！」

「ローンスター！」

「正解！ 1ポイント獲得。∴問題。宝塚歌劇団、記念すべき旗揚げ公演の演目は？」

ポーン！

「服部君！」

「桃太郎！」

「正解！ 服部君も1ポイント獲得！ 問題。迷惑メールのことをスパムメールといいます、このスパムとはもともと何の商品名？」

ポーン！

「蘭さん！」

「缶詰の名前！」

「正解！」

\*

「工藤君！」

caviarさんが新一に話しかけた。

「なんですか？」

「かなり走ったけど、全然ペースが落ちないね」

「サッカーじゃいつもこのくらい走ってますからね」

「そう言えば工藤君はサッカーやってたんだね。それでは問題。緑一色の国旗を採用している国といえば？」

ポーン！

「工藤君！」

「リビア」

「正解！ さあ、工藤君早くもリーチが掛かった。それでは問題。野球のバット、テニスのラケット、ゴルフのクラブ。このうち長さの規定がないのは？」

ポーン！

「工藤君」

「ゴルフのクラブ」

「正解。1 抜け〜！」

それを聞いた新一、例によって小さくガッツポーズをする。

「さあ、後ろの車に乗って！」

そして新一が勝者のみが乗ることが出来る車に乗り込んだ。そして7人で再びクイズが始まった。

\*

「問題。天気予報の『一時雨』と『時々雨』。降る確率が高いのはどっち？」

ポーン！

「快斗君」

「時々雨」

「正解！ 抜けた〜！」

「問題。かつては勝新太郎の当たり役。2003年、北野武監督・主演で映画化され、ベネチア国際映画祭の監督賞を取った作品といえは？」

ポーン！

「服部君」

「座頭市」

「正解！ 勝ち抜け〜！」

「問題。誕生日は1956年5月3日。お父さんの名前はピエール。

お母さんの名前は織江という今でも女の子に愛されている人形といえは？」

ポーン！

「蘭さん！」

「リカちゃん」

「正解！ 勝ち抜け〜！」

…と新一、快斗、服部、蘭と勝ち抜け、残りはとーやさん、稼頭矢さん、さばらさん、山崎佳実さんというCNRの4人となった。  
勝ち抜けた4人が後ろで見守る中、クイズが続けられた。

「問題。上半分が白、下半分が赤というまったく同じデザインの国旗を使っているのはモナコと何処？」

ポーン！

「山崎さん」

「インドネシア」

「正解！ 山崎さん、まだ大丈夫かい？」

「まだ大丈夫です」

「そうですね。それでは行こう、問題。お昼の番組でおなじみの司会者で本名・御法川法男と言ったら誰？」

ポーン！

「稼頭矢さん」

「みのもんた」

「正解！ さあ、稼頭矢さんにリーチが掛かった！ 問題。カーリングで主将のことを何と呼ぶ？」

ポーン！

「さばらさん！」

「スキップ」

「正解！ さあ、さばらさんにもリーチが掛かった。問題。ギリシヤ神話の美の女神アフロディーテ。ローマ神話ではなんと云う名前

？」

ポーン！

「稼頭矢さん」

「ヴィーナス」

「正解、抜けた〜！」

そして稼頭矢さんが後ろの車に乗り込む。

「さあ、残る席は後二つだ。問題。『判官びいき』の『判官』とは誰のこと？」

ポーン！

「さばらさん！」

「源義経」

「正解、抜けた〜！」

と、稼頭矢さん、さばらさんの二人が相次いで抜け、残ったのはとーやさんと山崎佳実さんの二人となった。

稼頭矢さん、さばらさんの二人が相次いで抜けた後は一進一退の攻防が続く、数問続いた後、とーやさんが2問正解し、ようやくリーチが掛かった。

「さあ、とーやさんにリーチが掛かった。それじゃ行こう、問題。アドルフ・ヒトラーが生まれた国は？」

ポーン！

「とーやさん！」

とーやさんが勝負をかけたようだ。

「ポーランド」

「残念。正解はオーストリア。とーやさんは1回休み。次の問題は山崎さんのみに出されます。問題。リトマス試験紙の『リトマス』とはもともと何のこと？」

「え……」

山崎さんは早押しボタンに手が伸びなかった。

「…来ないか？」

そして5秒が過ぎた。

「残念、正解は苔のこと。さあ、再び二人で対決だ」

二人ともスタートの頃と比べると明らかに走るスピードが落ちて  
いるようだった。

「問題。四角形の対角線は2本。では五角形は何本？」

二人が早押しボタンを押したが一瞬とーやさんのほうが早かった。

「とーやさん」

「5本」

「正解、抜けた〜！」

それを聞いたとーやさんが何度もガッツポーズをする。

一方の山崎さんはそれを聞くと天を仰ぐ。

そして、ゆっくりと2台の車は停止した。

後ろの車では最後に勝ち残ったとーやさんを6人が出迎えていた。

「…ふうっ…」

蘭はとーやさんを出迎えた後に早押し機に取り残された山崎さん  
を見てため息をついた。

そう、彼女が敗者となったことについて女性は蘭ひとりとなって  
しまったのだから。

「それでは、ニューオーリンズに向かってバンザイ！」

そして7人がバンザイをする。

ニューオーリンズ行き7名決定！

\*

「…お疲れ様」

caviarさんが山崎さんに話しかける。

「大変だったでしょう、ここまで」

「はい。最後の問題も答えがわかってたんですけど…、早押しボタ  
ンになかなか手が届かなくて…」

「今回の旅はどうでしたか？」

「一度復活できたし、ここまで勝ち残ることが出来たから満足です」「そうですか。じゃ、これからもCNRで面白いコラボレーション小説を書いてくださいね」

「はい」

そういう山崎さんの顔は何処となく晴れやかだった。

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

山崎さんが連れて行かれたのはダラス郊外にあるロデオのスタジオアムだった。

「実はですね、山崎さん。今日ここでロデオの大会がある、というんですがね」

「もしかして、馬に乗るんですか？」

「いくらなんでもそれは危険ですよ。山崎さんにやっていただいたいたのはですね、馬から落ちた人を暴れ馬から守るためのピエロの役をやっていたみたいですよ」

「え…」

そして山崎さんは地元のカウボーイから徹底的に特訓を受けた。

そして「最後の特訓」としてピエロの扮装をしてスタジアムの真ん中に連れてこられた。

ここで、迫り来る馬から逃げる練習をする、というのだ。

「山崎さん、大丈夫ですよ。あぶない、と思っただらすぐその小部屋に逃げればいいんですからね。それに何かあったら為にスタジアムの外では救急車とドクターが待機してますから」

「…はい」

そう言う山崎さんの顔は緊張の色が隠せなかった。

「それでは行こう。…Come on!」

caviarさんが言う。  
そしてゲートが開いた。

次の瞬間、

「やだあ…」

思わず山崎さんの顔から笑みがこぼれる。

出てきた馬はどう見たって人を襲いそうにない子馬で、しかも傍らでカウボーイが手綱を引いていたのだ。

そう、これは所謂「ドツキリ」だったのだ。

山崎さんが安堵の表情を浮かべた。

「はい、お疲れ様」

caviarさんがねぎらいの言葉を描ける。

9月 日 第8チェックポイント失格 山崎佳実 帰国

（第9チェックポイント・ニューオーリンズへ続く）

## 第8チエックポイント・ダラス（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「いやあ、一体どうなるかと思いましたが」

工藤有希子「…本当にお疲れ様でした。お疲れさま、ということまで二人「今日はここまで！」

優「さあ、次のチエックポイントはニューオーリンズ」

有「ミシシッピー川河口で対決クイズが行なわれます」

優「果たして優勝するのは誰か？」

有「そして優勝賞品のログハウスは誰のものに？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

第9チェックポイント・ニューオーリンズ（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第9 チェックポイント・ニューオーリンズ

アメリカ南部の都市でミシシッピ川河口にある街、ニューオーリンズ。

ニューオーリンズと言ったらジャズが有名だが、もう一つマーク・トウェインが書いた「トム・ソーヤの冒険」「ハックルベリー・フィンの冒険」といった小説の舞台でも有名であろう。

さて、ここまで勝ち残った7人はミシシッピ川河口を下る遊覧船に乗ってしばしの観光を楽しんでいた。

ここまで残ると何か連帯感のようなものがあるのだろうか、なんとなく和気藹々としたものがある。

そんな中、遊覧船も間もなく到着しようとしていた時だった。

「おい、アレなんや？」

服部が指をさす。

「あ……」

思わず絶句する7人。

服部が指差した先には棧橋があったのだが、その棧橋の先にはゲートがあり、さらにCNRウルトラクイズのMC台があったのだ。

「さあみんな、クイズをやるぞ！」

caviarさんが言う。

「えーっ！」

\*

「……ここで行ないますクイズは、リレー対決クイズです」

caviarさんが7人を前にして言う。

「まず私が先頭の人に問題を出します。そして先頭の人が不正解の場合は、次の人に解答権が移ります。次の人が不正解の場合はその次の人……という風に順番に解答権が後ろの人に移っていきます。」

そして、先頭の人が正解したらそのまま勝ち抜けですが、二番手以降の人が正解したら先頭の人と1対1の対決クイズを行ない、正解したほうが勝ち抜けとなり、敗れた方はそのまま先頭となり次の勝負を待つこととなります。ここで落っこちるのは1名。勝ち抜けと次はアトラクタへと行きます」

その声小さく歓声が上がった。

「さあ、まずはダラスでの勝ち抜けの順に並んでください」

そして先頭に新一が立ち、その後快斗、服部、蘭、稼頭矢さん、さばらさんと並び、最後尾がとーやさんだった。

「それでは行きましょう、問題。日本人ひとりが年間に食べる量のエビをエビフライにすると何本になる？」

新一「30本」「残念、次」

快斗「80本」「残念、次」

服部「100本」「残念、次」

蘭「50本」「残念、次」

稼頭矢さん「70本」「正解！ さあ、対決だ！」

そして稼頭矢さんが前に出て新一と並んだ。

「それではお二人への問題です。汽笛一斉新橋を『  
鉄道唱歌』の終点は何処？ 工藤君から』で始まる」

「大阪」

「残念、稼頭矢さん」

「神戸」

「正解。抜けたく！」

「やったー！」

それを聞いた稼頭矢さんが勝利者席に向かった。

そして6人で再びクイズが始まった。

「それでは問題。ジャガイモの芋はどの分が肥大化したもの？」

新一「茎」

「正解、抜けた〜！」

その声に思わずあ然とする5人。  
そして二人が抜けて残りが5人となった。

「それでは問題。アメリカ独立宣言発布後100年目に州に昇格した全米38番目の州といえは何処？」

快斗「アイオワ」「残念、次」

服部「アリゾナ」「残念、次」

蘭「ネバダ州」「残念、次」

さばらさん「オレゴン州」「残念、次」

とーやさん「コロラド」「正解！ さあ、快斗君と対決だよ」

そしてとーやさんと快斗が並ぶ。

「問題。『弱冠18歳』などと使う『弱冠』とは本来何歳の時に使う？ 快斗君」

「15歳」

「残念。とーやさん」

「20歳」

「正解、抜けた〜！」

それを聞いたとーやさんがガッツポーズをし、勝者席に向かった。

「さあ、3人が抜けた。残る席は後3つ。それでは問題。オリンピックのボクシング、唯一の金メダリストである桜井孝雄選手の階級はなんだった？」

快斗「フェザー級」「残念、次」

服部「ライト級」「残念、次」

蘭「フライ級」「残念、次」

さばらさん「バンタム級」「正解！ さあ、対決だよ！」

そしてさばらさんが前に来た。

「問題。『デッドヒート』の語源となったスポーツは？ 快斗君」  
「カーレース」

「残念。さばらさん」

「競馬」

「正解！ 抜けた〜！」

そしてさばらさんが勝利者席に向かう。

「では行こう、問題。NHK日曜夜8時のドラマを『大河ドラマ』と呼ぶようになったのは実はある民放の編成局次長でした。さて、その局は現在の何処？」

快斗「日本テレビ」「残念、次」

服部「フジテレビ」「残念、次」

蘭「テレビ朝日」正解！ さあ、対決だ！」

そして蘭が前に出た。

「問題。太陽系の惑星で最も比重が軽く、水に浮くことが出来る、と言われているのは？ 快斗君」

「木星」

「残念。蘭さん」

「土星」

「正解！ 抜けた〜！」

思わずあ然とする快斗と服部。

「さあ、残る席は後一つ。あなた方のうちどちらかが落ちることになりません。それでは行こう、問題。フランスのルーブル美術館は作者の死後ある一定の年数が経たないと作品を展示しない決まりがあります。それは何年後？ 快斗君」

「50年後」

「残念。服部君」

「60年後」

「正解！ さあ、最後の対決だ！」

そして服部と快斗が並んだ。

「問題。『人の噂も75日』。西洋のことわざでは何日？ 快斗君」

「1週間」

「残念。服部君」

「5日間」

「残念。もう一回、快斗君」

「10日間」

「残念。服部君」

「9日間」

「正解。抜けた〜！」

それを聞いた瞬間、服部が安堵の表情を浮かべ、快斗が天を仰いだ。

「あー、しんどかったわ…」

そう言いながら服部は5人が待つ勝者席に向かっていった。

「服部君、大変だったようだね」

「いや〜、なかなか正解にならへんし、初めて負けるんじゃないか、思いましたわ」

「ははは、そうかい。それではアトランタに向かってバンザイ！」

そして6人がバンザイをした。

アトランタ行き6名決定！

\*

「快斗君。残念だったね」

「どうも今日は勘が冴えなくて…」

「今回の旅はどうだった？」

「ほんとのことを言うともう少し先までいけると思ってたんですけどね」

「まあそうだろうね。でも今回のたびは必ず君にとって将来的にプラスになるはずだから、これからも頑張って下さいね」

「はい」

快斗が力強く頷いた。

そこには自分が敗者となったなどは感じられなかった。

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

船内からTシャツに短パンを穿き、裸足の快斗が出てきた。

「あなたへの罰ゲームは…、もうお解かりですね？」

「デッキの掃除ですか？」

「その通り。さあ、早速始めようか」

そしてcaviarさんが快斗にデッキブラシを渡した。

そして快斗は蒸気船のデッキの掃除を始めた。

「どうだい、快斗君？」

「ええ、すっかりとやっておきますよ！」

「それじゃ、それが終わるまでしっかりやっといてくれよ！」

「はい！」

そして快斗は黙々とデッキを掃除し続けるのだった。

9月#日 第9チェックポイント失格 黒羽快斗 帰国

（第10チェックポイント・アトランタへ続く）

## 第9チェックポイント・ニューオーリンズ（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「さあ、次のアトランタといえば映画『風と共に去りぬ』の舞台」

工藤有希子「私は高校生の頃にあの映画を見てものすごく感動した覚えがありますよ」

優「そういえばあの作品、上映時間が3時間48分もあるそうですね」

有「ええ。ですのであの作品は2部に分かれていて、途中で休憩が入ってるんですよ」

優「じゃあ我々も休憩と行きますか」

有「ということでは」

二人「今日はここまで！」

優「次はアメリカ南部の大都市、アトランタ」

有「南北戦争の舞台となった地で21世紀にクイズ戦争が行なわれます」

優「果たして激戦を勝ち抜くのは誰か？」

有「そしてクイズ王の称号を手に入れるのは誰か？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

**第10チェックポイント・アトランタ（前書き）**

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第10 チェックポイント・アトランタ

アメリカ・ジョージア州最大の都市であるアトランタ。

かつて南北戦争の舞台となった地として知られ、それを題材にした映画「風と共に去りぬ」は名作として語り継がれている。

他にもコカ・コーラ社の本社がある場所としても知られているし、1996年には夏季オリンピック大会が開催された所としても有名であろう。

さて、そのアトランタのある広場。6人の挑戦者が早押し台に座っていた。

こうして早押し機に座ってクイズを行なうのは実にロサンゼルス以来のことである。

そんな6人を前にしてcaviarさんが話しかける。

「ここで行ないますクイズは早押しダブルチャンスクイズです。私が出し、わかった人がボタンを押す所までは普通の早押しクイズと同じです。但し、最初に回答権を得た人がお手つきや誤答をした場合、2番目にボタンを押した人が回答権を得ることが出来ます。お手つき、誤答は1回休み、3ポイント先取です。ここで落ちるのは1名。ここを抜けますと次に行くのはいよいよアメリカ東海岸、マイアミです」

そう、ここを抜けるとようやくアメリカ東海岸、大西洋を見るこ

とが出来るとだ。

「それではクイズを始めましょう」

そして6人が早押しボタンに手をかける。

「それでは行きましょう、問題。ここ、アトランタがあるジョージア州で毎年ゴルフの全米オープンが行われる…」

ポーン！

とーやさんの早押しハットの「？」マークが立ち上がった。

「とーやさん」

「オーガスタ」

「正解！」『毎年ゴルフの全米オープンが行なわれる都市は何処でしょう？』正解はオーガスタ。とーやさん1ポイントを獲得。それでは行こう、問題。1912年に沈没したタイタニック号の……」

ポーン！

新一の早押しハットの「？」マークが立ち上がった。

「工藤君」

「ブルース・イズメイ」

新一が答えるとブザーが鳴った。

「え？」

「ダブルチャンス！」

ポーン！

今度は服部の早押し台に置いてあるパトライトが回った。

「服部君」

「ホワイト・スター・ライン社」

「正解。『タイタニック号を所持していた会社は？』正解はホワイト・スター・ライン社。工藤君、問題を深読みすぎたね。それでは行こう、問題。ぎっくり腰のことをヨーロッパでは『何の一撃』と呼ぶ？」

ポーン！

「さばらさん」

「魔女の一撃」

「正解！」

\*

と、このようにクイズは進んでいった。

「問題。中国料理の中で漢字で『くもをのむ』と書かれるものは？」

ポーン！

「服部君」

「ワントン（雲呑）」

「正解！ 一抜け〜！」

前回のラスト抜けが嘘のような鮮やかな勝ち抜けをまずは服部が決めた。続いてとーやさん、さばらさんの順に勝ち抜けを決めた。た。

そんな中、新一はどうしたのか、早押しボタンを一瞬の差で押し負ける、とか折角回答権が回ってきてても誤答をして他人に回答権を譲ってしまう、と言う彼らしくないミスを連発して3人が抜けた時点でも未だに1ポイントも取れないでいた。

「問題。富士山のふもとにある富士五湖は何県にある？」

ポーン！

「工藤君」

「静岡県」

ブザーが鳴った。

「ダブルチャンス！」

そして稼頭矢さんのパトライトが回った。

「稼頭矢さん」

「山梨県」

「正解！」

それを聞いた瞬間新一が「しまった…」という表情をした。

「工藤君、わかってたんだね？」

「はい。でも何故か先に静岡の方が頭に来ちゃって」

「次の問題は工藤君は一回休みです。問題。日本のポストの色は赤ですが、ではアメリカの…」

ポーン！

「稼頭矢さん」

「青」

「正解、抜けた〜！」

そして稼頭矢さんが4人目の勝ち抜けを決め、勝者席に向かった。残るは新一と蘭の二人となった。

「『アメリカのポストの色は何色でしょう？』正解は青。さあ、これに残る席は後一つとなりました。現在のポイントは蘭さんが1ポイント、工藤君がゼロ。それでは問題。国旗で使われている『汎アフリカ色』とは黄色・緑ともう一色は？」

ポーン！

「蘭さん」

「赤」

「正解。さあ、蘭さんリーチが掛かった。問題。日本ではビールを飲んでいいのは20歳からですが、ドイツでは何歳からOK？」

ポーン！

蘭の早押しハットの「？」マークが立ち上がった。

その瞬間、新一が苦虫を噛み潰したような顔をした。

「蘭さん」

「18歳」

不正解のブザーが鳴った。

それを聞いた瞬間「え？」と言う表情をする新一。

「ダブルチャンス！」

そして新一が早押しボタンを押す。

「工藤君」

「16歳」

「正解！ さあ、工藤君ようやく1ポイント。次の問題は蘭さんは1回お休み、工藤君だけに出ます。問題。16歳の誕生日に眠りに落ち、100年後に王子様のキスで目覚める姫と言ったら？」

ポーン！

「工藤君」

「眠り姫」

「正解。工藤君もリーチが掛かった。次で決まるか？ 問題。イエス・キリストと聖徳太子の誕生物語。共通する建物は？」

二人がほぼ同時にボタンを押したが一瞬の差で新一の早押しハットの「？」マークが立ち上がった。

「工藤君」

「馬小屋」

「正解。抜けた〜！」

2対0から一気に3ポイント連取して勝ち抜けを決めるほどの苦戦、そしてその相手が蘭だった、と言うこともあったのだろうか、それを聞いた瞬間、初めてと言っていいだろう、新一が安堵の表情を浮かべた。

そして新一が4人のいる勝者席に向かおうとした時だった。

「あ、そうだ、新一」

蘭が呼び止めた。

「…なんだ、蘭？」

「ここでお別れだね」

「ああ。そうだな」

「それでさ…、これ新一にあげる」

そう言うと蘭は左手にしていたブレスレットを外して新一に渡した。

「これは…？」

「ハワイで和葉ちゃんに貰ったの。もう私がしたって意味ないしね」

「蘭…」

「新一、頑張つてニューヨークに行つてね」

「ああ、わかった。お前のためにも行つてやるよ」

「ありがとう。じゃ、頑張つてね」

そして新一はブレスレットを嵌めながら勝者席に向かった。そんな様子を蘭が解答者席から見ていた。

「さあ、それじゃマイアミに向かってバンザイ！」  
そして5人がバンザイをする。

マイアミ行き5名決定！

\*

勝者5人がバスに乗り込もうとしていた。

「みんな、頑張つてね〜！」

回答者席の蘭がバスに向かって両手を振った。

そして5人は蘭に向かって手を振ると次々とバスに乗り込んだ。  
そしてバスが蘭の元を去っていく。

…そして蘭はそつとあふれる涙をぬぐった。

「…蘭さん。最後の女性としてよくここまで頑張つて来れましたね」  
「ええ。でもみんな実力がある人ばかりなんで、私がここまで来れるなんて信じられませんでした」

「今回の旅はどうでした？」

「なんて言うのかな…。今まで自分が経験したことのないことばかりで…。私自身にとってもとても有意義なものだったと思います」  
「うん。これからもこの経験を生かしてくださいね」

「はい」

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

蘭がcaviarさんに連れて行かれたのはアトランタ郊外にある野球場だった。

「実はですね、蘭さん。今日ここで地元の野球の大会があるそうなんです」

「私に何をやれ、と言うんですか？」

「あなたへの罰ゲームはここで売り子さんのアルバイトをしてもら

います」

それを聞いた瞬間蘭は思わず苦笑いを浮かべた。

更衣室でポロシャツにGパン、そしてサンバイザーという売り子のスタイルに着替えた蘭が出て来た。

そしてピーナッツ袋が入った箱が渡された。

その後蘭は指導を受けいよいよ本番となった。

\*

会場は3割程度の入りだろうか。それでもバックネット周辺はかなりの人で埋まっていた。

「（勿論英語で）ピーナッツいかがですか？ ピーナッツいかがですか？」

蘭が観客席を行ったり来たりしながら売り歩く姿がそこにあった。

9月\$日 第10チエックポイント失格 毛利蘭 帰国

（第11チエックポイント・マイアミへ続く）

## 第10チェックポイント・アトランタ（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「…蘭さんも落ちてしまいましたねえ…」

工藤有希子「これで残るは男性5名。ますます激しい戦いが繰り広げられることが予想されますね」

優「さあ、それでは次に参りましょう！」

有「というところなんですが…、今日はここまで！」

優「そうなんです。…さあ、次はいよいよ大西洋岸に到着、フロリダはマイアミ」

有「アメリカ有数のリゾート地で繰り広げられる激戦とは？」

優「いよいよ近づくクライマックス！」

有「果たして勝ち残るのは誰なのでしょう？」

優「勝てば天国！」

有「負ければ地獄！」

優「知力体力」

有「時の運」

優「早く来い来い」

有「次の回」

優「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

有「またお会いしましょう！」

第11チェックポイント・マイアミ（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 第11チエックポイント・マイアミ

アトランタからマイアミへ移動した頃、月が替わり10月となっていた。

しかし、である。1年中温暖な気候であるフロリダ州は10月でも半袖で過ごせるほどの環境でこの日も5人の挑戦者は半袖のTシャツ姿で会場となっているフロリダ州・マイアミのビーチに立っていた。

「皆さん、ビーチフラッグス、って知ってますか？」

caviarさんがいきなり5人に話しかけた。

「え？ ええ」

5人が頷く。

「そうですね。砂浜でフラッグを取り合うスポーツですが、それをここでやってみようかと思うんです」

思わず「は？」という表情をする5人。今現在残っているのが男性ばかりだから、こんな体力勝負のクイズにしたのだろうか？

「…ここで行ないますクイズは名付けて『クイズ・ビーチフラッグス』。まず挑戦者の皆さんはスタートラインにビーチフラッグスの要領で早押し機に後ろ向きになり、うつ伏せになって両手をあごの下において寝転んでもらいます。私が問題を出しますので、合図と共に起き上がって20メートル先に置いてある早押し機に向かってダッシュをしてください。そして1番最初に早押しボタンを押した人に解答権が与えられます。正解すれば1ポイント。お手つき・誤答は1回休みとなり、次の問題には参加できません。3ポイントで勝ち抜けとなります。ここを通過できるのは4名。次はいよいよ準決勝、ワシントンへと行きます！」

その声におおっ、と5人が歓声を挙げた。

「それでは準備して」

それを聞き、5人が砂浜の上に敷かれたマットの上うつ伏せになって寝転んだ。

「それでは行こう、問題。デイズニーランドがあるのはカリフォルニア州のアナハイム。では、デイズニーワールドがあるフロリダ州の都市は？」

そしてcaviarさんがホイッスルを吹くと同時に5人が起きだし、20メートル先の早押し機に向かってダッシュした。

とは言え砂の上は足場が悪く、足を取られるようで思ったように走れないようだ。

そんな中、文字通りタッチの差で早押し機を最初に押したのはとーやさんだった。

「とーやさん」

「オーランド」

「正解！ とーやさん1ポイント。さあ、戻って」

そして5人がスタート地点に戻った。

「問題。ここ、フロリダ州にあるスペースシャトルの発射基地があることで知られているケネディ宇宙センター。かつての名称は何？」

そして再び5人がダッシュした。

今度は早押し機を押したのは新一だった。

「工藤君」

「ケープ・カナベラル」

「正解！ 工藤君1ポイント！」

そして5人がスタート地点に戻る。

「問題。中国料理の四川、北京、上海、広東のうち一番辛いのは？5人がダッシュし、早押し機を押したのは稼頭矢さんだった。

「稼頭矢さん」

「広東」

「ブザーが鳴った。」

「残念。正解は四川料理。次の問題稼頭矢さんは1回休みです」

5人がスタート地点に戻る。

そして稼頭矢さんはスタート地点の後ろにあるペナルティエリアに立ち、残り4人がスタート地点に寝転んだ。

「問題。アルファベット小文字の筆記体。一筆書きをしないものはi、j、tともう一つは何？」

そして4人がダツシユし、服部が早押し機を押した。

「服部君」

「エックス」

「正解！ 服部君1ポイント！」

そして4人がスタート地点に戻り、今度は稼頭矢さんも加わって再び5人でクイズが始まった。

「問題。全米最大のプロレス団体、WWEではレスラーのことを何と呼んでいる？」

そして5人が走り出す。

服部と新一が早押しボタンに手がかり、一瞬だったが新一が早く押していた。

「工藤君」

「スーパースター」

「正解！ 工藤君、リーチが掛かった！」

そして5人がスタート地点に戻る。

「問題。2004年に亡くなったいかりや長介さんが書いた自伝のタイトルは？」

5人がダツシユし、今度は服部が早押しボタンを押した。

「服部君」

「『だめだこりゃ』」

「正解！ 服部君もリーチが掛かった！」

そしてスタート地点に引き返す5人。

「問題。グリム、アンデルセン、メーテルリンク。この中でノーベル文学賞を受賞したことがあるのは？」

再び服部が早押しボタンを押した。

「服部君」

「アンデルセン」

無情にもブザーが鳴った。

「残念、正解はメーテルリンク。服部君1回休みです」

そして服部がペナルティエリアに立ち、残り4人がスタート地点に寝転がった。

「問題。童謡『大きな古時計』。原詩では動いていたのは何年？」

それを聴いた瞬間、服部が正解を知っていたからだろうか、苦笑いを浮かべた。

そして4人はダツシュし、新一が早押しボタンを押した。

「工藤君」

「90年」

「正解！ 1抜け〜！」

「よし！」

そして新一が勝利者席に行った。

「まずは工藤君が1抜けを決めました。残る席は3つ。さあ、服部君が加わって4人で続けます」

そして4人となった挑戦者はスタート地点に寝転がった。

「問題、世界で初めて飛行機で空を飛んだライト兄弟。飛行機に最初に乗ったのは兄、弟のどっち？」

そして4人がダツシュし、一瞬の差でとーやさんが早押しボタンを押した。

「とーやさん」

「弟」

「正解！ とーやさんもリーチが掛かった！ それでは行こう、問題。パンダの尻尾は白、黒どっち？」

そして4人がダツシュした。

服部ととーやさんがボタンを争ったが、今度もとーやさんが先に押した。

「とーやさん」

「白」

「正解、抜けた〜！」

そしてとーやさんが2人目の勝者となった。

そして3人になって再びクイズが始まった。

数問クイズが進んだ後、

「問題。最近流行の『トリビア』について、かつて『人間は無用な知識が増えることで快感を感じる』ことが出来る唯一の動物である」と言っただSF作家は？」

そして服部が早押しボタンを押した。

「服部君」

「アイザック・アシモフ」

「正解、抜けた〜！」

そして服部が3人目の勝者となった。

\*

そして残るはさばらさんと稼頭矢さんの二人となった。

ここまで来ると2人の顔にも疲労の色が見えてきた。

体力を使うクイズ、ということ時々休憩は取っているのだが、やはり砂浜の上を走る、と言っただけは想像以上に体力を使うのだろうか。

「さあ、残る席はあと1つとなりました。稼頭矢さん、大丈夫ですか？」

その問に答えるかのように稼頭矢さんが右手を挙げた。

「さばらさん、大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「わかりました。現在のポイントは二人とも1ポイントです。それでは準備して」

そして二人がスタート地点に寝転んだ。

「問題。英語で『milk way』と言ったら何のこと？」

そして二人がダツシユする。

一瞬の差で稼頭矢さんが早押しボタンを押した。

「稼頭矢さん」

「天の川」

「正解。稼頭矢さんにリーチが掛かった！」

そして二人はスタート地点に戻った。

「問題。拾ったお金を警察に届けて落とし主が現れた時、支払われるお礼は、法律で最低何パーセント？」

今度はさばらさんが早押しボタンを押した。

「さばらさん！」

「10パーセント」

しかし不正解を告げるブザーが鳴った。

「残念。正解は5パーセント。次の問題さばらさんは1回休み。稼頭矢さんだけに出来ます」

そしてさばらさんがペナルティエリアに立ち、稼頭矢さんがスタート地点に寝転んだ。

「問題。アメリカの野球で『インサイド・ザ・パーク・ホームラン』と言ったら何？」

それを聞いた瞬間、さばらさんが「しまった…」という表情をした。

稼頭矢さんは一人だけだが全力で走り、早押しボタンを押した。

「稼頭矢さん」

「ランニングホームラン」

「正解。抜けた〜！」

「やったー！」

稼頭矢さんが地面をたたいて喜ぶ。

そして勝利者席に向かう稼頭矢さんを3人が出迎えた。

「さあ、4人の勝者が決定いたしました。次はいよいよ準決勝。そ

れではワシントンに向かってバンザイ！」  
そして服部、とーやさん、新一、稼頭矢さんの4人がバンザイをした。

ワシントンDC行き4名決定！

\*

「さばらさん、お疲れ様でした」

caviarさんがさばらさんに話しかける。

「いやあ…。いろんな意味で残念ですね」

さばらさんが言う。

「どうしてですか？」

「最後の問題がああいった形で答えられなくて、敗者になってしまった、って言うのが何とも心残りですね」

「まあ、確かに残念でしょうね。でも勝負というのはああいった形で終わってしまうこともあるんですよ」

「まあ、それは仕方ないんですけどね」

「今回の旅はどうでした？」

「月並みな言い方もしれないですけど、いろんな所に行くことが出来てとても楽しい旅でしたよ」

「そうですね。これからも頑張ってくださいね」

「はい」

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

「さばらさん、一寸このビーチを見回してください」

そしてcaviarさんとさばらさんはビーチを見渡す。

「綺麗ですねえ…。やはりこういう観光地と言うのは環境美化にも気を使ってるんでしょうね」

「そのようですね」

「でもね、さばらさんも海水浴場なんかで経験があると思いますけ

ど、ごういうビーチと言うのは結構落し物があるらしいですね」

「え？ まさか…」

「勘がいいですね。そう、さばらさんへの罰ゲームは金属探知機を使っただけでいい落し物を拾って貰いましょう」

それを聞いたさばらさんが苦笑した。

やがて金属探知機を手にしたさばらさんがやって来た。

「じゃ、お願いしますね。見つかったものはあそこに遺失物の届出センターがありますのであそこに提出してくださいね」

そしてさばらさんは金属探知機で落し物を探し始めた。

後で聞いた話によるといくつか落し物が見つかったらしい。

10月%日 第11チェックポイント失格 さばら 帰国

（準決勝・ワシントンDCへ続く）

第11チエックポイント・マイアミ（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「さあ、いよいよ4人が残りました！」

工藤有希子「いずれもここまで来るのに数々の難関を突破してきたツワモノ達です」

優「ここまで来たらやはり4人とも勝ちに行くでしょうね」

有「そうですね。目指すニューヨークまで後一步ですから」

優「果たしてどのような激戦が展開されるのでしょうか？」

有「そして決勝進出を決める二人は？」

優「それでは準決勝を御覧頂きましょう！」

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

準決勝・ワシントンD.C（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 準決勝・ワシントンDC

前のチエックポイント・マイアミからアメリカを一気に北上し、ワシントンDCへとやって来た。

マイアミは10月でも半袖で過ごせたのだが、さすがにワシントン市街の風景はすっかり秋で、長袖でないと過ごせなかった。

それはそうだろう。日本で言うならほぼ同緯度の沖縄から岩手県まで一気に北上したのだから。

さて、ワシントンといったら言うまでもなくアメリカ合衆国の首都である。

そのワシントンの象徴、とでも言うべき国会議事堂の近くにある広場に4台の早押し席が並べられており、左から服部、とーやさん、新一、稼頭矢さんの順で座っていた。

東京ドームには25000人以上が集まり、成田を出発した時は53人、アメリカ本土に上陸した時は13人だった挑戦者も今やこの4人だけとなっていた。

caviarさんが4人を前にして話しかけた。

「真夏の東京ドームに25000人を超える挑戦者が集まりました。そして、その中から幾多の難関を乗り越えて、現在残っているのはあなた方4人だけです。…服部君」

「はい」

「ここまで来てどうですか？」

「ようやく来ることが出来た、そんな感じですね」

「ここを突破したらニューヨークですが、自信はありますか？」

「勿論。ここまで来たからには絶対行かなアカン、そう思うとります」

「たいした自信だね。…とーやさん」

「はい」

「ここまで来ちゃいましたね」

「いや、本当にここまで来れたのが信じられません。運だけでここまで来たようなものですから」

「前にも言ったと思うけど、ツキも実力のうちだよ。でも、ここまで来たからにはやはりニューヨークに行きたいだろ？」

「勿論です」

「そうですね。…工藤君」

「はい」

「ここまで君は安定した戦いぶりを見せてるけど」

「いや、思った以上にみんなが強敵で正直言って苦戦の連続ですよ。でも、決勝まで後一つですから、絶対勝ち抜いてみせます」

「わかりました。…稼頭矢さん」

「はい」

「これだけのメンバーの中でかなりの健闘を見せてますね」

「でも本当にここまで来れるまで思いませんでした。でもやはり、ここまで来たからにはニューヨークに行きたいです」

「…わかりました。さて、ここで行ないますクイズは準決勝といたらコレしかありません、『激戦！ 通せんぼクイズ』。まず早押しクイズを行ないます。お手つき・誤答はマイナス1ポイント。3ポイント取ったらA、Bどちらかの問題を選んでこの通過席に来てください」

「そう言うcaviarさんの傍らにはもう一台の早押し台が置かれていた。」

「…通過問題に正解すれば勝ち抜けですがお手つき・誤答をしたり、解答者席の他の人に答えられたりしたらポイントがゼロとなり、解答者席に戻ってもらいます。ここを通過できるのは2名。次はいよいよ決勝のニューヨークです！」

「そう、いよいよここを通過できれば誰もが夢見たニューヨーク行きとなるのだ。」

「それでは行きましょう、問題。二二、ワシントンDCの『DC』とはどういう意味？」

ポーン！

「服部君」

「コロンビア特別区」

「正解！ 服部君1ポイント獲得。問題。日本が2011年ワールドカップの招致を計画しているスポーツと言えば？」

ポーン！

「工藤君」

「ラグビー」

「正解！ 工藤君も1ポイント」

\*

そして準決勝の名に恥じない早押しバトルが展開されていった。

「さあ、工藤君、服部君、とーやさんの3人が2ポイントで並びました。それでは行こう、問題。1970年の大阪万博を記念して…」

ポーン！

「工藤君」

「タイムカプセル」

しかし不正解を告げるブザーが鳴った。一瞬「え？」と言う表情をする新一。

「…大阪万博を記念してタイムカプセルが埋められたのは何処？」

caviarさんが言うと、

「あ、大阪城か…」

「その通り。工藤君、勝負を焦ったね。これで工藤君の得点は1ポイントになります。それでは行こう、問題。ラグビーのトライは成功すると5点入りますが、アメリカンフットボールのタッチダウンは何点？」

ポーン！

「とーやさん」

「6点」

「正解！ とーやさん3ポイント獲得。さあいらっしやい！」

とーやさんが立ち上がると「B」の袋を持って通過席にやって来て、caviarさんに封筒を渡した。

そして早押しハットをかぶる。

「さあ、とーやさん、決めることが出来るか？ 問題。黒澤明監督の映画『用心棒』が原作のブルース・ウィリス主演の映画といえは？」

とーやさんも早押しボタンを押したが、一瞬服部の方が早かった。

「服部君」

「ラストマン・スタンディング」

「正解！ とーやさん、ポイントがゼロになりました」

そしてとーやさんが早押しハットを脱ぐと解答者席に戻った。

「…そして今度は服部君が3ポイント獲得し、通過席にきました」  
caviarさんがそう言っている間に服部が「A」の封筒を持って通過席に来た。

服部が早押しハットをかぶるのを見てから、

「問題。偽り隠していたものが現れ、化けの皮がはがれることを『何を表す』と言う？」

そこにいた4人がほぼ同時にボタンを押したが、今度はとーやさんが早かった。

「とーやさん」

「馬脚」

「正解！ 服部君、阻止した相手に今度は阻止されてしまいました」  
そして服部が自分の席に戻った。

\*

「問題。車のナンバープレートに使われない文字は全部で4文字。それはへ、し…」

ポーン！

「工藤君」

「お」

「正解。『…へ、し、んとあと一文字は？』。正解は『お』。さあ、工藤君3ポイント獲得」

そして新一が「A」の封筒を持って通過席にやって来て、早押しハットをかぶり、早押しボタンに手を掛けた。

それをcaviarさんが見届けると、

「行くぞ、問題。太平洋を“pacific ocean”と名づけた冒険家と言ったら？」

4人がほぼ同時に早押しボタンを押したが、早押しハットの「？」マークが立ち上がったのは通過席にいる新一だった。

「工藤君」

「マゼラン」

一瞬の静寂の後、正解を告げるチャイムが鳴った。

「おめでとう！ 決勝進出〜！」  
caviarさんが叫んだ。

「よし〜！」

そして例によって小さくガッツポーズをすると、勝利者席に向かっていった。

その様子を見ている残された3人。

「さあ、工藤君が決勝進出を決めました。残る席はあと一つです」

「問題。カルタ、タコ、コマ。童謡『お正月』に出てこない遊びと  
言えば？」

ポーン！

「稼頭矢さん」

「カルタ」

「正解！ さあ、稼頭矢さん3ポイント獲得です」

そして稼頭矢さんが「B」の封筒を持って通過席にやって来た。

例によって早押しハットをかぶるのをcaviarさんが見届け

てから、

「問題。京都府にある地名で漢字で『一口』と書くのは何処？」

それを聞いた稼頭矢さんは早押しボタンに手が行かず、代わりに服部の早押しハットの「？」マークが上がった。

「服部君」

「いもあらい」

「正解！ やはりこの問題は関西人が有利だったか？ 稼頭矢さん、ポイントがゼロに戻ります」

そして稼頭矢さんが解答者席に戻った。

「問題。ボクシングのトレーニングにも用いられ、英語でロープスキップ」

「ポーン！」

「服部君」

「縄跳び」

「正解！ 『英語でロープスキップといわれるのは何？』。正解は縄跳び。服部君、これで3ポイント獲得です」

そして服部が「A」の封筒を持って2回目の通過席にやって来て、早押しハットをかぶった。

「問題。太陽系の惑星で地球の次に大きな星は何？」

そして服部が早押しボタンを押した。

「服部君」

「火星」

一瞬の静寂の後、不正解を告げるブザーが鳴った。

その瞬間「え？」と言う表情をする服部。

「残念、正解は金星。服部君、ポイントがゼロに戻ります」

そして服部は早押しハットを脱ぐと解答者席に戻った。

その後クイズは進み、3人の攻防が続いた。

「さあ、3人が1ポイントで並びました。それでは行きましょう、

問題。夏目漱石の小説『坊っちゃん』。主人公と同じ東京出身の画  
学の教師と言えは？」

ポーン！

「服部君」

「野だいこ」

「正解。服部君2ポイント獲得。問題。76年に一度地球に接近す  
るハレー彗星。次に地球に接近するのは西暦何年？」

ポーン！

「服部君」

「2062年」

「正解。さあいらっしやい！」

そして服部は今度は「B」の封筒を持ってやって来た。

これまで2回通過席にやってきたが、いずれも通過に失敗したか  
らか、服部は早押しハットをかぶると、己に気合を入れるかのよう  
に一回深呼吸をしてから早押しボタンに手を掛けた。

「さあ、服部君3回目の通過席です。それでは行こう、問題。CD

1枚の最大演奏時間を決める際、基準となったクラシック音楽は？」

3人がほぼ同時に早押しボタンを押したが、服部の早押しハット  
の「？」マークが立ち上がった。

「服部君」

「ベートーベンの第九」

一瞬の静寂。そして正解を告げるチャイム。

「正解！ 決勝進出だ〜！」

「よっしやあ！」

それを聞いてとーやさんと稼頭矢さんの二人がうなだれてしまう。

「さあ、いよいよ決勝に進出する二人が決定いたしました。服部君

「はい」

「対戦相手の工藤君をどう思いますか？」

「いやあ、一番来て欲しくない相手が来たわ」

「ハハハ、そうかい？」

「でも、相手にとって不足はなし。ええ戦いができると思います」

「工藤君」

「はい」

「対戦相手の服部君をどう思いますか？」

「そうですね。やっぱり来たか、って感じですよ」

「やはりそう思いましたか」

「でもね、これ以上ない素晴らしい相手だと思います」

「そうですね。決勝戦は服部平次VS工藤新一、宿命のライバルと言わなければならない二人の組み合わせで行なわれます。それでは決勝地・ニューヨークに向かってバンザイ！」

そして服部と新一がバンザイをした。

決勝進出2名決定！

\*

「…とーやさん」

caviarさんがとーやさんに話しかける。

「はい」

「…あと一歩だったね…」

「でもホント、ここまで来ることが出来ただけで満足ですよ」

「しよっちゆう言っていましたよね？」 『ここまで勝ち残れたのは運だけだ』って」

「…はい」

「でも、運だけじゃここまで勝ち残ることはできなかったと思いますよ。それだけの実力が備わっている、と言うことなんだから、自信を持って」

「はい」

「…稼頭矢さん」

今度は稼頭矢さんに話しかけた。

「はい」

「ここまで勝ち残ることが出来たのは立派だと思えますよ」

「いや、本当に運だけで勝ち残ってきたようなものですよ。それに…」

「それに？」

「悔しくない、って言ったら嘘ですけど、こんなに楽しかったのは初めてです」

「そうだろうね。君たちは準決勝の名にふさわしい戦いを繰り広げただから」

「はい。ですから胸を張って帰りたと思います」

「そうだね。今回の経験はあなたにとっていい思い出になると思えますよ」

<FONT size="5"> 罰ゲーム </FONT>

とーやさんと稼頭矢さんの二人はワシントンを流れるポトマック川に連れてこられた。

「えー、突然ですが、二人ともちよつとジャンケンをしていただけますか？」

「え？」

そして二人がジャンケンをした。稼頭矢さんが勝ち、とーやさんが負けた。

「それではとーやさんはこれを、稼頭矢さんはこれを持って下さい」とーやさんにはオールが、稼頭矢さんには釣竿が渡された。

「…なんですか、これは？」

「あなた方への罰ゲームは、ボートでポトマック川を下って帰ってもらいます」

それを聞いた二人が思わず苦笑いを浮かべる。

そして二人と荷物を積んだボートがゆっくりと川岸を離れた。

「それじゃ気を付けて帰ってくださいよ。稼頭矢さん」

「はい！」

「わかつてると思うけど、その釣竿で魚を釣れば食料には困りませんからね！」

「はい！」

そしてとーやさんの漕ぐ「東京直行」の垂れ幕が掛かったボートはゆっくりとポトマック川を下っていった。

caviarさんがそれを見送る。

「随分とゆっくりですね…。これじゃ日本につくまでどのくらい掛かるやら…」

10月¥日 準決勝失格 とーや、稼頭矢 帰国

（決勝・ニューヨークへ続く）

準決勝・ワシントンDC（後書き）

日売テレビスタジオ。

工藤優作「さあ、いよいよ決勝戦に進出する二人が残りました！

…それにしても自分の息子が決勝に残るとは思いませんでした」

工藤有希子「いやいや、でも対戦相手の服部君も新ちゃんに優るとも劣らない素晴らしい相手だと思いますよ」

優「そうですね。これ以上ない素晴らしい相手に恵まれてアイツも幸せ物かもしれませぬね」

有「でも、稼頭矢さんもとーやさんもよくここまで来ることが出来たと思いますよ。私はこの二人の健闘も称えたいですね」

優「そうですね。お二人には心から拍手を贈りたいと思います。さあ、いよいよ最後の戦いが始まります！」

有「果たしてCNRクイズ王の座に付くのはどちらか？」

優「ニューヨーク・決勝戦です！」

決勝…の前に（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 決勝：の前に

ニューヨークは快晴だった。

その抜けるような青空の下、2機のヘリコプターが摩天楼を眼下にして飛んでいた。

そして、その2機のヘリを追いかけるように飛んでいる1機のヘリがあった。

そのヘリに乗っているのはcaviarさんだった。

「…ニューヨークは素晴らしい晴天に恵まれました。そして、この青空は1ヶ月に及ぶ長い旅をし、ようやくここまでたどり着いた我々を温かく迎え入れてくれるようにも思われます」

caviarさんがカメラに向かって話していた。

「ニューヨークの皆さん、こんにちは。私は今日、とても誇れる若者2人を連れて、このクイズの都へとやって参りました」

そしてカメラが2機のヘリを映す。

「…例えば、残暑の厳しい日本を後にして、グアム、ハワイ、ロサンゼルス、グランドキャニオン、ダラス、アトランタ、マイアミ、ワシントン…、アメリカ各地で数々の熱戦が繰り広げられ、数多くの敗者が涙を飲んで戦いの場から去っていきました。そして今、残った二人が最終決戦の地に馳せ参じようとしてるのであります。果たしてヘリコプターから見える摩天楼の風景に今、二人の若者は何を思っているのでしょうか」

そしてカメラが先頭のヘリを映す。

「まず、前方のヘリに乗っているのは服部平次君であります」

よく見ると服部がcaviarさんの乗っているヘリに向かって手を振っている。

「大阪府出身、改方学園高校2年生。機内ペーパーテスト第3位であります。関西人特有の明るい性格がそうさせるのであります」

か、今回の旅においても我々のムードメーカーとして挑戦者達を引っ張っていた頼れる存在でありました。クイズの方もその実力を遺憾なく発揮し、その戦法はじっくりと様子を見て、機会を見て一気に攻め込む、という彼が得意としている剣道に似ているものがあります。ニューオーリンズのリレークイズで敗者になりかけたのが唯一のピンチらしいピンチでありましたが、それ以外のチエックポイントでは安定した強さを見せております。決勝戦を前にして彼は対戦相手の工藤君は一番戦いたくなかった相手、しかし、彼と決勝で戦うことを楽しみにしていた、と私にこう言っておりました」

そしてカメラが後方のへりを映す。

「そして後方のへりに乗っているのは工藤新一君であります」

新一の方もcaviarさんの乗っているへりに向かって手を振っていた。

「東京都出身、帝丹高校2年生。機内ペーパーテスト第1位であります。彼はいつでも沈着冷静。どのような場においても決して慌てることはなく、その冷静さはクイズにおいても遺憾なく発揮され、その戦法はまさに電光石火の早業。その切れ味はまさに鋭いナイフのようにも思われます。それを証明するかのようにほとんどのチエックポイントで上位抜け。特に、ロサンゼルスや準決勝では我々もあっと驚くような華麗な1抜けを見せてくれました。しかしそれだけではありません。アトランタで2対0の圧倒的に不利な状況から3ポイント連取して勝ち抜く、という粘り強さも彼は持っております。彼は服部君についてこう語っております。これ以上ない素晴らしい対戦相手。決勝戦という最高の舞台に於いて、彼と雌雄を決することはこれ以上ない光栄なことである、と」

カメラは2機のへりコプターを映す。

「偶然ではありますが、二人ともミステリーが大好きでそれぞれ『西の名探偵』『東の名探偵』との異名を持ち、また、服部君は剣道が、工藤君はサッカーが好きという若者でもあります。知力、体力、時の運、いずれをも兼ね備えている挑戦者でもあります。この二人

はいわば宿命のライバルとでも言うべき関係であり、この決勝戦の場に於いてこの二人が戦う、ということはある意味運命だったのかもしれません」

そしてへりは自由の女神が立っているリバティ島へと近付いてきた。

「さあ、自由の女神が見えてまいりました。東京ドームに集まった25000人誰もが憧れたニューヨーク、そしてその象徴とでも言うべき自由の女神は、本日も満面の笑みを浮かべております。じつくりと攻めるタイプの服部君、片や電光石火の早業で攻める工藤君。この2人の男が25000人の頂点に立つべく雌雄を決する時が今やってきたのです。果たして東の工藤か、西の服部か。自由の女神の微笑を手にかけるのが出来るのはどちらなのでありましようか？ それを知っているのはただ自由の女神のみ。そして『真実はいっも一つ』しかないのであります！」

（今度こそ本当に決勝に続く）

決勝…の前に（後書き）

作者より…できれば「アメリカ横断ウルトラクイズ」にふさわしく「あの曲」（「オールド・ジエームス・ボンド・バーボン」とか言っそうな）を思い浮かべながら読んでください。

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

決勝・ニューヨーク（前書き）

くどいようですが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## 決勝・ニューヨーク

ニューヨーク。東京ドームに集まった25000人を越える挑戦者誰もが夢見た街である。

そのニューヨークの中心街であるマンハッタン。既に陽は落ちて辺りが夕闇に包まれていた。

そのマンハッタンを流れる川、イーストリバー。その上に一隻の遊覧船が浮かんでいた。

その船名を「プリンセス号」と言う。

そう、CNRウルトラクイズの決勝はマンハッタンの夜景をバツクにこの船上で行なわれるのだ。

\*

マーチングバンドが「When You Wish Upon a Star（星に願いを）」を奏でる中、決勝戦に進んだ服部と新一の二人が甲板に現れた。

二人とも決勝戦、と言うことだからか服部は詰襟、新一はブレザーというそれぞれ二人が通っている高校の制服姿だった。

司会のcaviarさんもスーツ姿である。

服部と新一の二人が早押し台の脇に立ち、caviarさんに一例をし、お互いの相手に向かって一例をすると早押し台に腰掛けた。そしてプリンセス号の汽笛が鳴る。

「摩天楼に陽が落ちて、あたりが夕闇に包まれています。二人とも、ちよつと後ろを見ていただけますか？」

caviarさんの声に後ろを向く二人。二人の目の前にはマンハッタンの夜景が広がっていた。

「きれいな夜景だねえ。この夜景を見ることが出来たのはあなた方二人だけです。そしてこの夜景をモノにすることが出来るのは一人だけです。…服部君」

「はい」

「この夜景を見てどう思いましたか？」

「いやあ、こう実際に自分の目で見るとやはり違いますわ」

「そうですか。ここまでたどり着くことが出来たんですからね」

「はい。これを見て、ようやくニューヨークへやって来たという実感が湧きましたわ」

「ところで、何で詰襟の制服を着ているんですか？」

「自分にとっては、これが正装だからです」

「そうですか。対戦相手の工藤君をどう思いますか？」

「相手にとつて不足は無し。工藤と決勝を争うことが出来るのはこれ以上ない喜びです」

「そうですか。…工藤君」

「はい」

「この景色を見てどう思いました？」

「成田を出発した時から、この夜景を見ることだけしか考えてませんでした」

「そうですか。凄い自信ですね」

「いや。まあ、それは誰もが考えることだと思いますけどね。でも、やっぱり自分の目で見る事が出来てよかったです」

「ところで、対戦相手の服部君をどう思いますか？」

「これ以上ない素晴らしい相手だと思ってます。服部と決勝を戦うことが出来るのは身に余る光栄です」

「そうですか。…では、服部君にお聞きします。クイズ王になるのは誰ですか？」

「誰が何と言おうと、この服部平次です」

「わかりました。工藤君にお聞きします。クイズ王になるのは誰ですか？」

「工藤新一、ボクです」

「わかりました。決勝戦は10ポイント先取の早押しクイズ。お手続き、誤答はマイナス1ポイントとなります。お二人のこの戦いが

決勝戦の名にふさわしい素晴らしい素晴らしい戦いであることを期待します。それでは、早押しハットを装着してください」

二人が早押しハットをかぶった。

「只今よりCNRアメリカ横断ウルトラクイズ、ニューヨーク・決勝戦を始めます。ボタンに手を置いて」

そして二人が早押しボタンに手を掛ける。

「問題。メジャーリーグ、NBA、NFL、NHL。このうち、ニューヨークを本拠地に行っているチームが1球団だけなのは？」

ポーン！

「服部君」

「NBA」

「正解。服部君1ポイント。問題。尾崎紅葉の『金色夜叉』。貫一が宮を足蹴にしたのは何処の海岸？」

ポーン！

「工藤君」

「熱海」

「正解。工藤君も1ポイント。問題。2002年ソルトレークシテイオリンピックから採用された競技で、橇にうつ伏せに乗って降りる競技とは？」

ポーン！

「工藤君」

「スケルトン」

「正解。1対2」

と出だしは新一が快調に滑り出した。

\*

「さあ、得点は2対5で工藤君が3ポイントのリード。問題。ナポリ民謡『フニクリ・フニクラ』で行こう 行こう 火の山へと歌われている…」

ポーン！

「服部君」

「ベスピオ山」

「正解！ 『歌われている火の山とは何処？』。正解はベスピオ山。これで3対5。問題。宅配便のキャラクター。黒猫はヤマト運輸。ペリカンは日本通運。では…」

ポーン！

「服部君」

「西濃運輸」

「正解！ 『では、カンガルーは？』正解は西濃運輸。さあ、これで4対5です。服部君追い上げてきました。それでは行こう、問題。標準的な120分のビデオテープの長さは何メートル？」

ポーン！

「服部君」

「160メートル」

「正解。さあ、服部君、同点に追いつきました」と、ここでcaviarさんは二人に一息入れさせようと思っただ、

「…だいぶビルにも明かりがついてきましたね」

見ると何時の間にもやらあたりはすっかり暗くなり、あちこちのビルに灯りが点っていた。

そして遊覧船が出発したことにはそれほど明るい、とは思わなかった二人を照らし出しているライトも今では二人を明るく照らし出していた。

プリンセス号はゆっくりとイーストリバーを下っていく。

「…問題。1894年、東京以外の場所で国会が開かれたことがありますか、その場所は何処？」

ポーン！

「工藤君」

「大阪」

と、不正解のブザーが鳴った。

「残念、正解は広島です。これで工藤君はマイナス1ポイント。初めて服部君がリードしました。問題。メジャーリーグで最初に背番号を採用したのはヤンキースですが…」

ポーン！

「服部君」

「打順」

「正解！ 『その基準となった順番は？』。正解は打順。さあ、これで6対4。服部君2ポイントリードです」

このあと、二人が1ポイントずつ獲得し、得点は7対5となった。  
「問題。夏目漱石の門下生であり、『或阿呆の一生』『蜘蛛の糸』などの…」

ポーン！

「服部君」

「芥川龍之介」

「正解！ 『…などの作品を残した作家と言えば？』。答は芥川龍之介。さあ、8対5となりました。工藤君も頑張つて！ 問題。かつてハワイ諸島に…」

ここまで聞いたところで新一が早押しボタンを押した。

「工藤君」

「サンドイツチ諸島」

「…正解！ 『かつてハワイ諸島にヨーロッパ人が付けていた名前は何？』正解はサンドイツチ諸島。これで8対6。問題。日本海流のことを黒潮と…」

ポーン！

「工藤君」

「青潮」

「正解！ 『…黒潮といいますが、では対馬海流のことを何と言う？』。正解は青潮。さあ、これで8対7となりました。問題。店な

どで客がまばらなことを…」

ポーン！

「工藤君」

「カッコウ」

「正解！ 』まばらなことを「閑古鳥が鳴く」といいますが、この「閑古鳥」とは何？』。正解はカッコウ」

新一がここで打ったバクチが功を奏し、一気に8対8の同点に追いついた。

「さあ、得点は8対8。これでまた勝負の行方がわからなくなってきました。問題。MLBで初の黒人選手となったジャッキー・ロビンソン…」

二人が同時にボタンを押したが、わずかに服部の方が早かった。

「服部君」

「ブルックリン・ドジャース」

しかし、不正解のブザーが鳴った。

それを聞いて二人が思わず「え？」と言う表情をした。どうやら新一も同じ答を考えていたようだ。

「『ジャッキー・ロビンソンの功績を称え、全球団で永久欠番となった背番号は何番？』。…何番だかわかるね？」

「42番」

「そのとおり。服部君1ポイントマイナス。これで7対8。問題。野球のユニフォーム。Jリーグでは何と呼ぶ？」

ポーン！

「工藤君」

「キット」

「正解！ これで7対9」

それを聞いてか、マーチングバンドがいつでもファンファーレを鳴らせるように準備を始めた。

「…それでは行くぞ、問題。『カニ』とは言うが、タラバガニは実は何の仲間？」

二人が同時に押したが、服部の早押しハットの「？」マークが立ち上がった。

「服部君」

「ヤドカリ」

「正解。さあ、これで8対9です。問題。デパートの閉店の音楽にも使われている『蛍の光』は何処の国の民謡？」

これまた二人が同時にボタンを押したが、わずかの差で新一の「？」マークが立ち上がった。

「工藤君」

新一は大きく息を吸うと、

「スコットランド！」

ピンポンピンポン！

「正解！ クイズ王になって〜い！」

マーチングバンドがファンファーレを鳴らした。

新一は両手で早押しハットを持つとこみ上げてくる喜びをかみしめる。

…そして早押しハットを脱ぐと、両手を突き上げ全身で喜びを現した。

そんな新一を見て服部が、

「工藤、おめでと」

そう言つて、右手を差し出した。

新一もそれに応え右手を差し出し、二人が固い握手を交わした。

\*

「おめでと！ コングラッチュレーション！」

caviarさんの声に新一が早押し台から降りてきた。

「さあ、まずは優勝旗の授与です」

そして新一が優勝旗を受け取る。

「続いてミス・ニューヨークより花束の贈呈です」

そして花束が授与された。

「工藤君、本当におめでとう」

「ありがとうございます」

「いやあ、さすが工藤君、見事な勝ちっぷりでしたね」

「いえ、そうでもないですよ。たまたま運がよかつただけです」

「今回の旅は、工藤君にとってどんな旅でしたか？」

「そうですね…、なんていうのかな。いろんな人と知り合えて、いろんな所に行くことが出来て、苦しいながらも楽しい旅でしたね」

「そうですね」

「でも、ようやくホッとなりましたよ」

「なんでですか？」

「やっとこれで旅も終わるんだな、って」

「そうですね。…さ、それじゃ周りを見回そう。この夜景は、あなたのもんです」

そう言われて新一が辺りを見回す。

そんな様子を服部がさつきから解答者席で見っていた。

二人とも満足げな表情をしていた。

\*

プリンセス号はゆっくりとリバイ島へ向かっていた。

「おい、工藤」

服部が何かに気づいたか、新一に話しかけた。

「なんだよ？」

「今気づいたけど、その左手、なんや？」

「そう、新一の左手にはブレスレットがはまっていたのだ。」

「ああ、これか…。蘭がアトランタで落ちた時、オレにくれたんだ。何でも『和葉ちゃんがハワイでくれた』とか言ってたな…」

「ずつとしてたんか？」

「ああ、蘭が落ちてからずつとな」

「工藤、一つ言っただけか？」

「何だ？」

「そのブレスレットな、オレが和葉に買ってやったモンやで」

「え…？」

「なんや、結局はオレがお前の優勝サポートしたようなもんやないか。あー、もう気分悪いわ！」

「ははは…」

そういう二人の顔は笑っていた。

そしてプリンセス号がリバイ島に立っている自由の女神へと近付いてきた。

二人はそれをずっと見上げていた。

（エピローグへ続く）

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

## エピソード・戦い終わって（前書き）

ここまで来ても言いますが、この作品は全くの創作です。  
この作品はフィクションであり、この作品に登場する人物・団体は  
実際のものとは一切関係ありません。

## エピソード・戦い終わって

日売テレビスタジオ。

「さあ、それでは、優勝者の入場です！」

工藤有希子の声に優勝旗を手にした新一とcaviarさんが拍手に迎えられ、スタジオに入ってきた。

「まずはcaviarさん、お疲れ様でした」  
有希子が言う。

「いえいえ、こちらこそ」

caviarさんが言う。

「いや、しかし息子のご迷惑を掛けっぱなしで…、本当に失礼しました」

工藤優作が言う。

「いえいえ、そんなことありませんよ。まあ、それにしても終わってみれば、彼の強さが際立った内容でしたね」

「ところで皆さん。気になりますか？」

有希子が言う。

「あ、優勝賞品のロッキー山脈の家、でしょう？」

優作が言う。

「はい。さあ、果たしてどんな優勝商品だったのか？ 御覧戴きましよう」

\*

ニューヨーク決戦が終わり、日本へと帰国する服部たちとホテルの前で別れた新一はcaviarさんと共にコロラド州デンバーへと飛んだ。

そこからさらに車を飛ばし、山の麓にある村に新一は来ていた。

そこには一人の男性が新一を待っていた。

「Nice to meet you…工藤君、この方がこの地主さんです。…さて、工藤君。これを覚えていきますね？」

そういつとcaviarさんは新一がダラスで見た権利書を取り出した。

「これにあなたのサインを入れたら、その時点で家はあなたのものになるわけです。サインしていただけますね」

「はい」

そして新一は万年筆を受け取るとcaviarさんが指差した箇所「Shinichi Kudoh」とサインを入れた。

「おめでとう、これで家はあなたのものになったわけです」

そして新一と地主が握手を交わした。

「さあ、それでは家を見に行こうか」

そして二人は歩き出した。

\*

どのくらい歩いただろう。

「ほら、工藤君。あれが君の家だよ」

caviarさんが指差す。

そこには家、と言うよりは小屋、と言ったほうがいいような建物が建っていた。

「あれ…、ですか？」

「そうだよ。あ、そうだ、これが合鍵だよ」

そしてcaviarさんが鍵を渡した。

よく見ると扉に鍵が掛かっている。

「さあ、入ってみようか」

そして新一は鍵を開け、中に入った。

「…あ？」

中に入った瞬間、新一は呆然としてしまった。

室内には家具らしい家具は一つもなく、荒れ放題に荒れていたのだ。

「あ、そうだ、工藤君。一つ言い忘れてたんだけどね。この家は建ててから何十年も経っているそうだからあちこちがぼろくなってる

ねえ。リフォーム代に日本円で数百万掛かる、って聞いたんだよね、それを聞いた瞬間、

「ははは…」

新一が苦笑した。

「どうしたんだい？」

「そんなことだろうと思いましたがよ。ウルトラクイズの賞品だから、なんかオチがあるな、と思ってたんですけどね」

「じゃあどうするんだい？」

「何年掛かっても、いくらお金が掛かってもリフォームしますよ」

「そうかい」

\*

「…さて、そろそろ番組も終わりに近付いてきたわけですが、もし第2回があるとして、参加者に一言アドバイスがあるとしたら？」

優作が新一に聞く。

「そうですね。まずは勝とうと思わないでクイズを楽しむくらいの余裕を持つこと。そうすれば結果はちゃんと付いてくるはず。それから、自分を信じて、たとえ負けたとしても悔いが残らないようにすること。以上かな」

「いや、綺麗に決まりましたねえ。…それでは、勝てば天国！」

「負ければ地獄！」

「知力体力」

「時の運」

「早く来い来い」

「あるかどうかわからないけど、次の回」

「史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズで」

「またいつか、お会いしましょう！」

（おわり）

## エピソード・戦い終わって（後書き）

<FONT size="5">>作者より</FONT>

こんにちは、ともゆきです。

ということで全18話に及ぶ「CNRアメリカ横断ウルトラクイズ」これで完結です。

木曜日のクイズ番組、と言ったら今は「ファイナルアンサー？」ですけど、10年ちよつと前まではこんなスケールの大きく、そして面白いクイズ番組があつたんですね。

小学生、中学生の時に夢中になつて番組を見ていた私はこれでアメリカの地名を覚えまししたし。

今回はその「ウルトラクイズ」の興奮を私自身の手で再現してみたのですが、いかがだったでしょうか？

（実際には1998年に復活したんですけど、あれはちよつとねえ……。私が見たかったのはああいうウルトラじゃなかつたんですが…）

尚、今回問題の作成に当たつて、以下の文献を参考ならびに引用しました。

「アメリカ横断ウルトラクイズ」日本テレビ

「アメリカ横断ウルトラクイズ」虎の巻」日本テレビ

福留功男「アメリカ横断ウルトラクイズ伝説」日本テレビ

「トリビアの泉」講談社

杉村喜光「知泉 元祖」へえ」716連発」二見書房

杉村喜光「知泉PART2 元祖」へえ」939連発」二見書房

「トリビア博物館 366の「へえ」」コスミック

「ときめきの放課後 ねっ クイズしよ パーフェクトガイド」新紀元社

エンサイクロネット「トリビアの王様 究極の無用雑学700」光

それではまた次回作でお会いしましょう。

```
<FONT size="5"></FONT>  
NT>
```

実はこの話を2004年に「コナン小説リング」にて発表した時、ビデオ等を見ないで私の記憶を元に書いていたんですね。

後でビデオを見直してみたところ記憶とだいぶ違っていた部分が目に付いたのでいつか書き直したいとは思っていたんですが、なかなかその機会に恵まれなくて…。

今回、caviarさんのご好意でCNR掲載分を削除していただいたのでこれを機に話の構成をTV放送時のそれと同じように組み替えました。

また、本来でしたらCNRから「名探偵コナンノベルズ」に移るに当たりタイトルも「DCNアメリカ横断ウルトラクイズ」とでも改め、DCNになってから参加した皆さんも話の中に出すべきなのではないかと、それをやってしまうと際限がつかないし、場合によってはストーリーそのものを全面的に書き直さざるを得なくなってしまうため、泣く泣く若干の加筆と修正にとどめた事をご理解ください。m( )m  
とは言えいつかはDCNの作家の皆さんも出した話はやってみたいですね。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6766b/>

---

史上最大！ CNRアメリカ横断ウルトラクイズ（加筆修正版）

2009年6月27日21時48分発行